

嘉麻市文化財調査報告書 第3集

# 一丁五反遺跡

## 白井遺跡群 棧敷原遺跡

2012

嘉麻市教育委員会



嘉麻市文化財調査報告書 第3集

# 一丁五反遺跡

## 白井遺跡群 棧敷原遺跡

2012

嘉麻市教育委員会



## 序 文

本書は、下臼井日吉神社の鉾害復旧工事に伴い、平成12年度に行われた棧敷原遺跡と嘉麻市千手の一丁五反における防火水槽設置工事に伴い平成21年度に行われた一丁五反遺跡の発掘調査報告書で、二つの遺跡の合本となっています。

棧敷原遺跡の調査では、弥生時代前期の貯蔵穴1基が確認され、発掘調査が実施されましたが、社殿の位置により遺構を完全に調査できませんでした。しかし、貯蔵穴の底には多くの土器が残されており、極めて一括性の高い土器資料ということが明らかとなりました。今後、当資料は嘉穂地域における弥生時代の初期的な稲作社会の拡散を示す、年代の尺度として活用されるとともに、北部九州の内陸部における基本資料として、諸地域との比較検討が可能となる重要な考古資料となるでしょう。

一丁五反遺跡の調査では、わずか72㎡の調査面積にもかかわらず、縄文、弥生、古墳、奈良と長期にわたる人々の住まいや生活の痕跡が明らかとなりました。特に、弥生時代中期後半期には、硬質な蛇紋岩製の石斧を製作していた状況が明らかとなり、石斧製作に不可欠な砥石も多く検出されました。この石斧製作に関しては、平成2・3年度に検出された同地域のアナフ遺跡と類似していることが判明したことから、千手地域内の複数集落で当該期に蛇紋岩製の石斧が製作されていたことが明らかになってきました。

以上のように、いずれも小規模な調査面積ですが、多くの貴重な資料を得ることが出来ました。今後、本書が学術研究をはじめ地域の歴史を解き明かす一資料となれば幸いと存じます。

最後に、調査にあたっては地元関係者の方々をはじめ、行政関係部局の多大なるご協力に対し、記して感謝申し上げます。

平成24年3月31日

嘉麻市教育委員会

教育長 栗野 良一

## 例 言

- 1 本書は、耐震性貯水槽設置工事に伴い平成21年度に事前調査をした一丁五反遺跡と下臼井日吉神社の鉋害復旧工事に伴い平成12年度に事前調査をした棧敷原遺跡の記録である。
- 2 出土遺物の整理作業及び報告書の作成は嘉麻市教育委員会で行った。
- 3 本書に掲載した遺構実測図は福島日出海、松浦宇哲、常盤拓生が作成した。
- 4 本書に掲載した遺物実測図は福島日出海、松浦宇哲、常盤拓生、紫原香世が作成した。
- 5 本書掲載図の製図作業は松浦宇哲、常盤拓生、紫原香世がおこなった。
- 6 本書に掲載した遺構及び遺物の写真は松浦宇哲、常盤拓生が撮影した。
- 7 本書に使用した方位は磁北を示し、標高は海拔を示す。
- 8 土層及び遺物の色調は『新版 標準土色帖』（財団法人日本色彩研究所）を参考としている。
- 9 図版の遺物写真に付した番号は本文挿図の遺物番号と対応する。
- 10 本文の執筆は、I - 4 - (2)、(4)、(6) 及び I - 5 を福島日出海が担当し、他は松浦宇哲が担当した。
- 11 本書の編集は松浦宇哲がおこなった。
- 12 出土遺物、写真、図面はすべて嘉麻市教育委員会にて保管している。

# 本文目次

I	一丁五反遺跡	
1	調査に至る経緯	1
2	調査経過と調査の組織体制	1
3	位置と環境	2
4	調査の内容	4
	(1) 遺跡の概要	4
	(2) 縄文時代の遺物	4
	(3) 弥生時代の遺構	6
	(4) 弥生時代の遺物	8
	(5) 古墳時代以降の遺構	22
	(6) 古墳時代以降の遺物	23
5	総括	32
II	臼井遺跡群 棧敷原遺跡	
1	調査に至る経緯と調査経過	33
2	遺跡の概要と歴史的環境	34
3	調査の内容	34
	(1) 貯蔵穴	34
	(2) 貯蔵穴出土土器	37
	(3) 貯蔵穴出土土製品・石器	47
4	総括	48

# 図版目次

(一丁五反遺跡)

図版1	① 上層遺構群 (北から)	② 下層遺構群 (西から)	
図版2	① 1号竪穴住居跡	② 2号竪穴住居跡	③ 2号住居跡土器出土状況
	④ 4号竪穴住居跡	⑤ 4号住居跡遺物出土状況	
図版3	① 4号住居跡南隣ピット土器出土状況	② 土坑遺物出土状況	
	③ 3号竪穴住居跡	④ 土師器壺出土状況	⑤ 掘立柱建物跡
図版4	縄文土器・弥生土器	図版5 弥生土器	図版6 石器・土製品
図版7	砥石・敲石	図版8 須恵器・土師器・石製品	図版9 古式土師器

(棧敷原遺跡)

図版10	① 貯蔵穴 (西から)	② 貯蔵穴遺物出土状況 (南から)	
	③ 貯蔵穴遺物出土状況 (東から)		
図版11	弥生土器 (蓋・鉢)	図版12 弥生土器 (甕) 1	図版13 弥生土器 (甕) 2
図版14	弥生土器 (壺) 1	図版15 弥生土器 (壺) 2	図版16 土製品・石器

## 挿 図 目 次

第1図	主な周辺遺跡分布図 (1/25000) .....	3
第2図	調査区土層及び遺構配置図 (1/60) .....	5
第3図	包含層出土縄文土器実測図 (1/2) .....	6
第4図	1号竪穴住居跡実測図 (1/40) .....	7
第5図	2号竪穴住居跡実測図 (1/40) .....	7
第6図	4号竪穴住居跡・土坑実測図 (1/20) .....	8
第7図	1号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/4) .....	10
第8図	1号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/4) .....	11
第9図	2号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4) .....	13
第10図	4号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4) .....	15
第11図	ピット・土坑出土土器実測図 (1/4) .....	16
第12図	試掘・包含層出土土器実測図 (1/4) .....	17
第13図	石器実測図1 (1/2) .....	19
第14図	土製品・石器実測図 (1/2) .....	20
第15図	石器実測図2 (1/4、1/6) .....	21
第16図	3号竪穴住居跡実測図 (1/40) .....	24
第17図	掘立柱建物跡実測図 (1/40) .....	24
第18図	3号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4) .....	25
第19図	試掘・包含層出土古式土師器実測図 (1/4) .....	26
第20図	試掘出土須恵器・土師器・石製品実測図 (1/4、1/2) .....	27
第21図	周辺地形及び調査区位置図 (1/25000、1/200) .....	35
第22図	貯蔵穴実測図 (1/20) .....	36
第23図	貯蔵穴出土土器実測図1 (1/4) .....	38
第24図	貯蔵穴出土土器実測図2 (1/4) .....	40
第25図	貯蔵穴出土土器実測図3 (1/4) .....	41
第26図	貯蔵穴出土土器実測図4 (1/6) .....	43
第27図	貯蔵穴出土土器実測図5 (1/4) .....	44
第28図	貯蔵穴出土土器実測図6 (1/4) .....	45
第29図	貯蔵穴出土土製品・石器実測図 (1/2) .....	47

## 表 目 次

第1表	一丁五反遺跡出土土器観察表 .....	29
第2表	一丁五反遺跡出土石器・土製品観察表 .....	31
第3表	棧敷原遺跡出土土器観察表 .....	46

# I 一丁五反遺跡

## 1 調査に至る経緯

平成21年5月、文化財保護部局である生涯学習課より本市が実施する公共工事等の照会を関係各課等におこなったところ、総務課より市内4箇所において耐震性貯水槽設置工事の予定がある旨の回答を受けた。工事予定地は、いずれも「周知の埋蔵文化財包蔵地」には含まれておらず、また、工事面積も狭小なことから、本課の文化財係が工事への立会をおこなうことで総務課の協力を求めた。8月17日、千手地区の耐震性貯水槽設置のための床掘工事において立会をおこなったところ、地表下約20cmで須恵器、弥生土器等の良好な遺物包含層を確認した。工事面積は狭小であったが、遺物の出土量と残存状況から遺跡の保存状態の良さが予想されたため、一旦、工事の中断をお願いし、再度、生涯学習課と総務課とで協議をおこなった。協議の中で、貯水槽設置箇所等の計画変更は難しく、遺跡の現状保存は困難と判断されたため、遺跡の重要性を鑑み、改めて記録保存のための発掘調査期間を設けることで総務課の了解を得た。

なお、今回、発見された遺跡は地区名を冠し、「一丁五反遺跡」として周知化した。

## 2 調査経過と調査の組織体制

調査は、平成21年8月19日から9月4日の期間で実施した。短期間の調査であったため、19、20日はバックホウを投入し、厚い遺物包含層を除去しながら遺構の検出に努めた。出土遺物は奈良時代から弥生時代に至るまで多岐にわたり、各時代の遺構が複雑に重複する複合遺跡であることが判明した。21日は基準点の設置作業等をおこない、24日から人力による遺構の発掘を実施した。上層遺構については、遺構の見極めが困難なものがあり、結果的に見逃してしまった遺構もある。また、下層からは縄文土器の出土もあり、遺跡の年代がさらに遡ることが追認できた。天候にも恵まれ、9月4日には図化作業、写真撮影等も終了し、予定どおり調査を完了した。

本遺跡の発掘調査及び整理作業は直営にて実施した。組織体制は以下のとおりである。

調査主体	嘉麻市教育委員会		
総括	嘉麻市教育委員会	教育長	山崎輝男
	教育部	次長	秋吉俊輔
	生涯学習課	課長	大塚正則
		課長補佐	伊藤節
庶務・調査	文化財係	係長	福島日出海（調査担当）
		係	松浦宇哲（調査・整理担当）

調査・整理作業参加者 江藤司、末次昭枝、藤嶋政博、常盤拓生、紫原香世

なお、発掘調査から整理作業までの間、ご理解とご協力を頂いた関係各位に厚く感謝申し上げます。

### 3 位置と環境（第1図）

一丁五反遺跡は福岡県嘉麻市千手467番地1に所在する。本遺跡が所在する嘉麻市は、隣接する飯塚市、嘉穂郡桂川町と共に、北側を除く三方を山塊に囲まれた盆地内に位置する。通称、嘉穂盆地と呼ばれるこの盆地南部には標高900m級の古処、屏、馬見の山々が連なり、これらに源を発する大小の河川が盆地内を南北に貫流して、遠賀川水系を形成する。

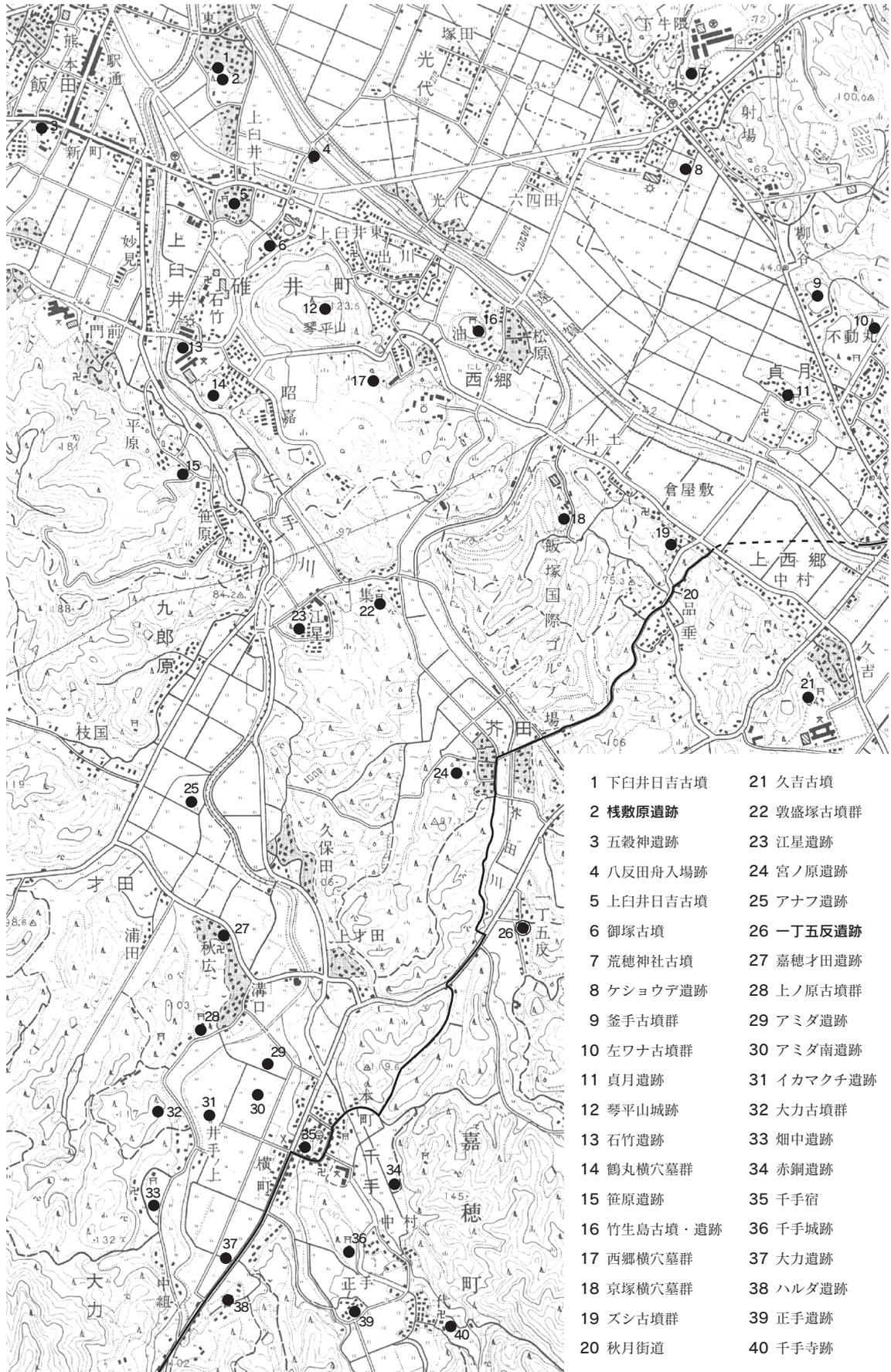
本遺跡のある千手地区周辺では、縄文時代以降の遺跡が過去の発掘調査等から明らかとなっている。標高80mを越える地点に立地する赤銅遺跡（34）、大力遺跡（37）からは、縄文時代早期に遡る押型文土器などが出土している。また、アミダ遺跡（29）では、中央の広場を円形に囲んだ後・晩期の屋外炉や住居群などが発見されており、定住の跡をうかがい知ることができる。

弥生時代前期になると、千手川沿いに棧敷原遺跡（2）、石竹遺跡（13）、イカマクチ遺跡（31）の集落遺跡が点在し、水稻農耕の拡散が認められる。中期には、江星遺跡（23）、アナフ遺跡（25）、赤銅遺跡（34）、ハルダ遺跡（38）など、遺跡数がさらに増加すると共に大規模な墓群の形成もみられるようになる。アナフ遺跡（25）では、木棺墓17基、土壙墓80基、甕棺墓84基などが検出されているが、甕棺はいずれも小、中型品で成人用としては木棺、土壙が主体となる。また、玉類や石製武器類を副葬する墳墓も確認された。弥生時代後期の集落遺跡では、ケショウデ遺跡（8）、貞月遺跡（11）、アミダ南遺跡（30）、イカマクチ遺跡（31）などがみられる。墳墓では、五穀神遺跡（3）、笹原遺跡（15）のように後漢鏡1面を副葬する石棺墓が出現する。

弥生時代後期の集落は、古墳時代前期においてもその機能が継続していたものが少なくない。遠賀川右岸の貞月遺跡（11）は60棟を超える弥生時代後期後半から古墳時代初頭の竪穴住居群が密集して検出されている。古墳時代中期以降の集落遺跡は概して小規模で分散傾向がみられるが、古墳の分布は首長墓、群集墳を問わず、一定の分布を確認できる。首長墓級の古墳を列举すると、前方後円墳では墳長約30mの久吉古墳（21）、墳長約50mの竹生島古墳（16）、大型の円墳では、直径約34mの下臼井日吉古墳（1）がある。このうち、竹生島古墳は円筒埴輪や形象埴輪を有する古墳時代後期の首長墓であることが、近年の調査で明らかとなった。嘉穂盆地では、後期群集墳として横穴墓群の造営が主体となる地域であるが、遠賀川上流域に当たる南部では横穴墓群に加え、数基単位の高塚古墳群が一定数、分布することも特徴となっている。

中世においては、千手の地を拠点に土豪として成長し、大内氏、秋月氏などの家臣として活躍した千手氏関連の遺跡が点在する。千手氏の居館と考えられる千手城跡（36）をはじめ、厩などの機能が推定される柵で圍繞した大型の総柱建物が検出された赤銅遺跡（34）、蔵骨器として利用された李朝陶磁器、香炉などが出土した千手寺跡（40）などがある。

近世において本遺跡周辺は秋月藩領となる。近隣の上臼井村には舟入場（4）と蔵屋敷が置かれ、当地域の年貢米はここから大坂の市場へと輸送された。また、長崎街道が整備されるまで、筑前の主要交通路としての役割を担った秋月街道（20）の沿線には、宿場町として千手宿（35）が開かれた。一丁五反遺跡をはじめ本街道沿線には弥生時代以来の遺跡も多く分布することから、峠を越えれば筑後川流域へと通ずる本交通路が古くから開設されていた可能性が示唆される。



第1図 主な周辺遺跡分布図 (S=1/25000)

## 4 調査の内容

### (1) 遺跡の概要 (図版1 第2図)

本遺跡は遠賀川の支流である芥田川によって開析された標高約73mの段丘上に形成されている。調査面積は72㎡と狭小であったにもかかわらず、遺構として掘立柱建物跡1棟、竪穴住居跡5棟、土坑2基、ピット複数を検出した。遺物では縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器等が出土し、数量はコンテナー28箱を数える。弥生時代の遺物量の割合が多く、本調査区の遺構も弥生時代が主体を占めている。

調査区の基本層序は東側で床土下から黄褐色粘質土の地山面まで6層に分層できる。床土直下のピット、土坑の遺構群は近世以降のものである可能性が高い。第2層から第4層までは黒褐色のしまった土で、第2層には奈良時代まで、第4層には古墳時代までの遺物を包含している。第2層直下から第4層までの遺構群は奈良時代及び古墳時代のもと考えられる。第5層及び第6層は、暗褐色の炭化物を含む土で、弥生時代までの遺物を含む層である。旧地形は全体に山手側にあたる東南から北西方面に傾斜しているため、東側の弥生時代の住居跡と西側の古墳時代後期の住居跡はほぼ同じレベルで検出されている。

なお、遺構密度が高いことに加え、遺構覆土と包含層との差異が色調等から明瞭に区分できず、結果的に見逃してしまった遺構もある。弥生時代の2号竪穴住居跡と重複していた古墳時代後期の5号竪穴住居跡がそうで、試掘出土の須恵器・土師器等の報告資料内には5号住居跡に伴う遺物が含まれているものと思われる。また、弥生時代の1号住居竪穴跡の上面、攪乱坑の北隣で検出した古式土師器壺(第19図の8と7)は、その出土状況(図版3の4)から土坑等の遺構に伴う遺物であった可能性がある。

今回の調査区の北側では、過去の耕地整理中に成人用甕棺墓が出土したということである。伝千手地区の細形銅剣の資料も伝えられており、本遺跡はその候補地として考えられる。

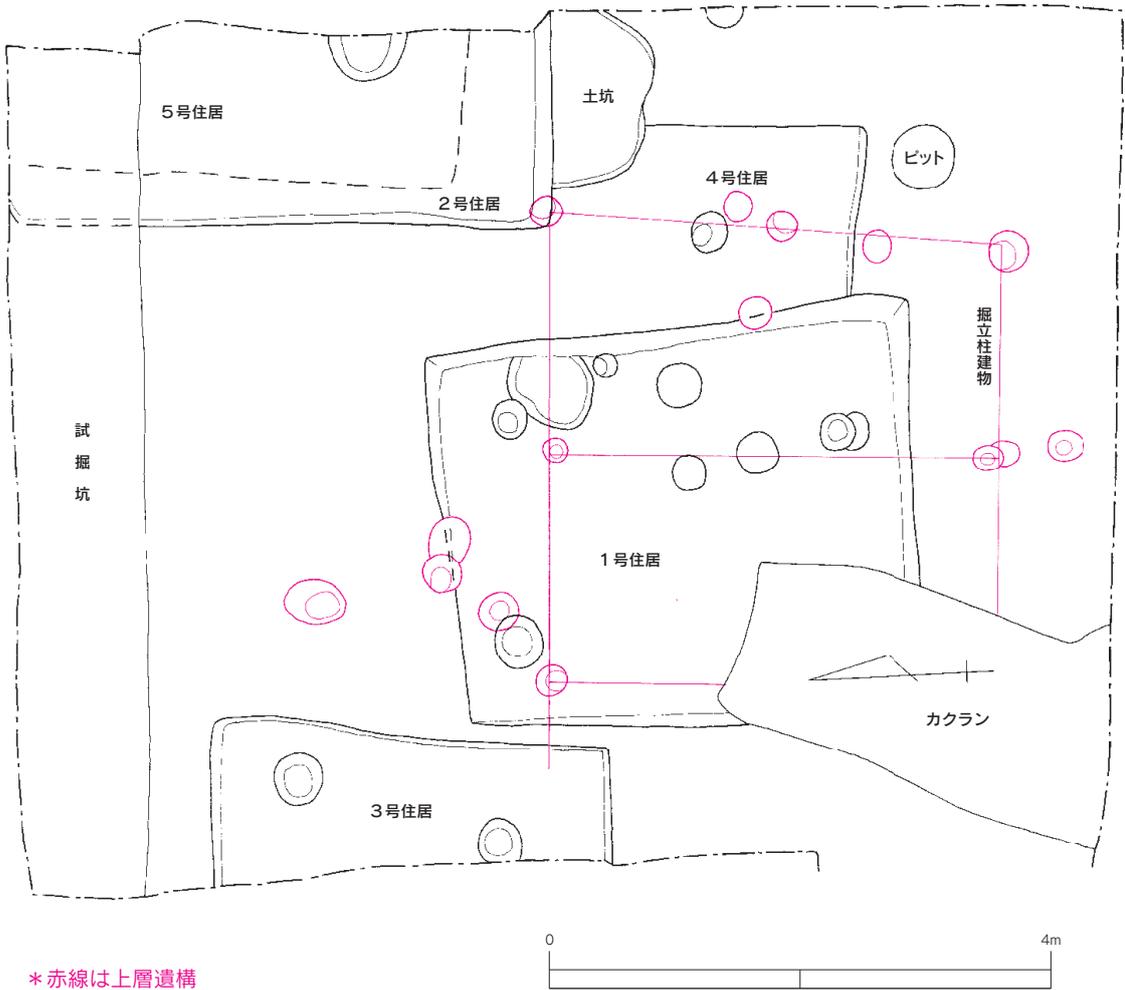
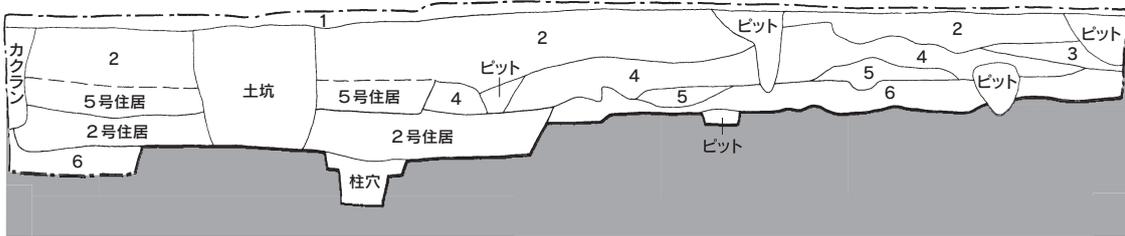
### (2) 縄文時代の遺物

今回の調査では、縄文時代の遺構は検出されていない。弥生時代の1号竪穴住居跡の床面下等から5点の縄文土器小片が出土しており、図化できたのはそのうちの4点である。

#### 包含層出土縄文土器(図版4 第3図)

**深鉢(1~4)** 1はほぼ直立する口縁部の端部にキザミメを施し、外面に2条の細い粘土紐を貼り付けて三角状の隆起線とし、内外両面共に横位の浅いナデ状の条痕文による器面調整を行っており、諸特徴から轟B式で縄文時代前期を示す。2は口縁部がやや屈曲した形状で内外両面に横位のミガキよる器面調整を行っており、黒色磨研土器に属す。3は外反する口縁部の下方に1条の粘土紐を貼り付けて方形の突帯にし、キザミメを施している。内外両面の調整は条痕文で外面は縦横両方の方向を示すが、内面は横位である。型式上は突帯の位置がかなり下方に下がる特徴から、従来の山ノ寺式土器の範疇と考えられる。4は胴部で内面はナデ、外面にはミガキによる仕上げが観察される。なお、2と4に関しては山ノ寺式を下限とした晩期の範疇で把握されよう。

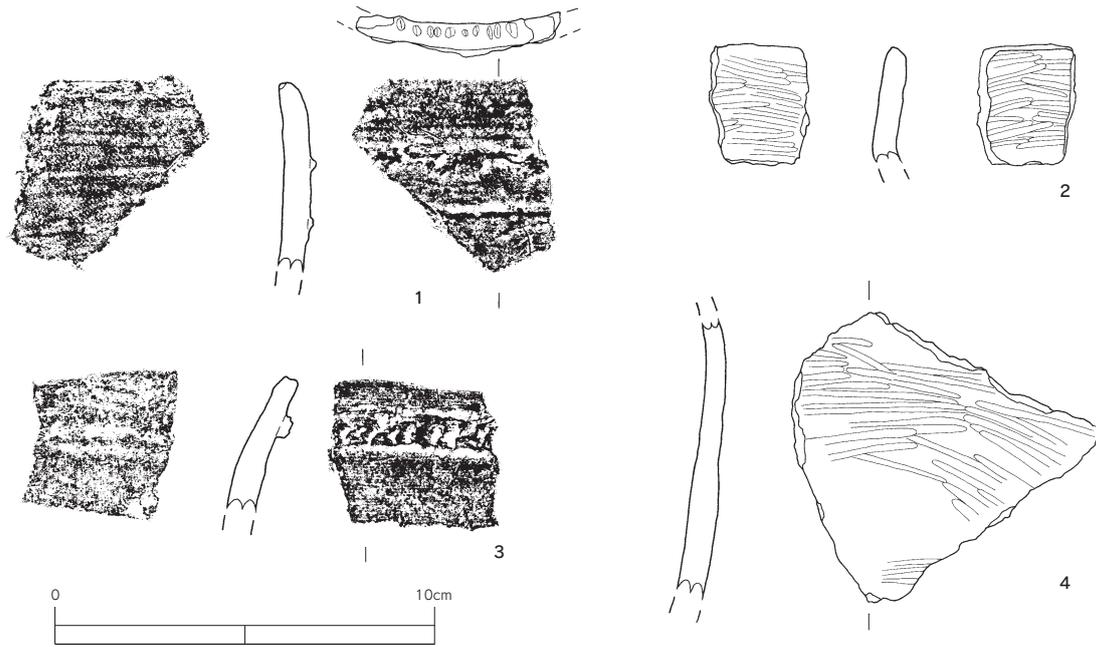
調査区東壁



土層

- 1.床土。
- 2.10YR3/1 黒褐色土。粘性があり、しまっている。遺物多い。
- 3.10YR3/1 黒褐色土。遺物少ない。
- 4.10YR3/2 黒褐色土。遺物多い。
- 5.10YR3/3 暗褐色土。炭化物を含む。焼土が混じる。
- 6.10YR3/3 暗褐色土。炭化物を含む。

第2図 調査区土層及び遺構配置図 (S=1/60)



第3図 包含層出土縄文土器実測図 (S=1/2)

### (3) 弥生時代の遺構

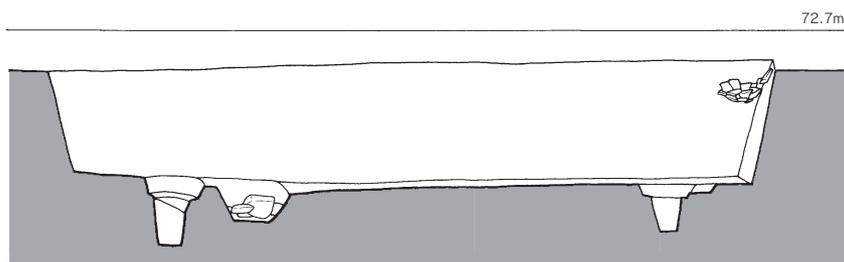
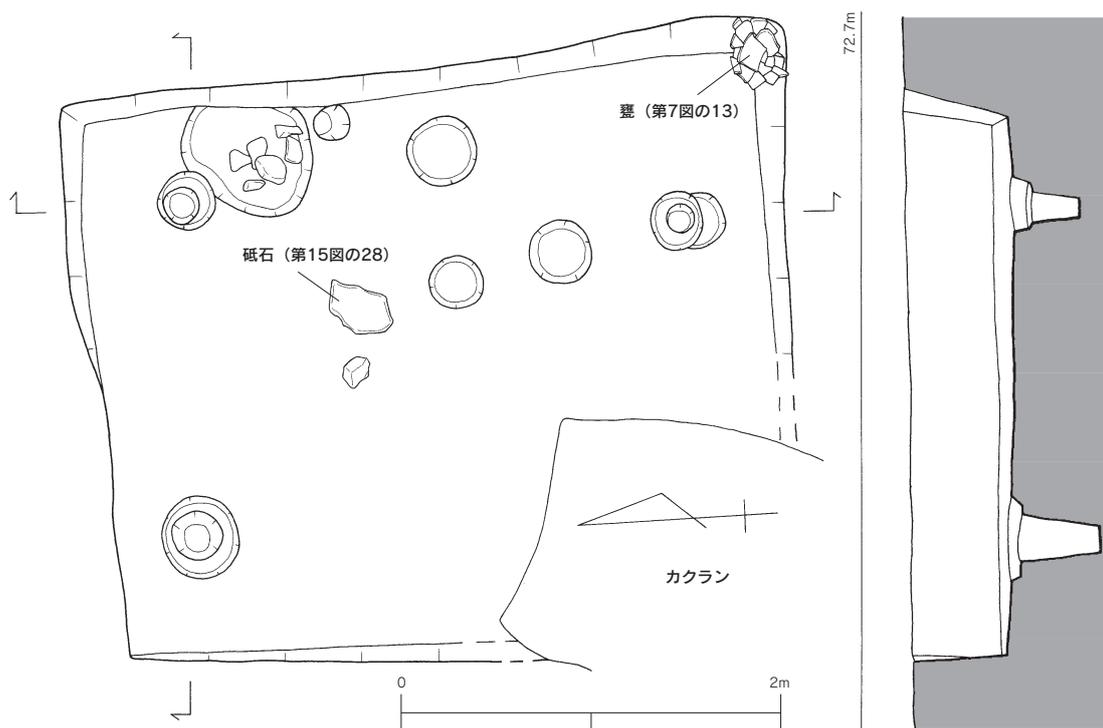
**1号竪穴住居跡** (図版2 第4図) 調査区の中央に位置する3.8×2.9mの南北にやや長い方形竪穴住居跡で、壁高は60cm前後を測る。南西コーナーは攪乱を受けており、床面では3つの柱穴を確認、炉跡等は検出されていない。なお、東北コーナー付近に拳大の礫を含む、直径70cm程の小土坑を検出したが、覆土内の遺物から本住居跡に伴う遺構ではないと判断される。住居跡の覆土内からは、弥生土器片、石包丁、石斧等が多数出土したほか、床面直上で大型の砥石 (第15図の28)、また東南コーナーの床面より40cm上位で甕 (第7図の13) が出土している。

**2号竪穴住居跡** (図版2 第5図) 調査区の北東コーナーに位置する1辺4.2m程の方形竪穴住居跡で、壁高は30cm前後を測る。住居跡の大半は調査区域外にあたる。古墳時代の5号竪穴住居跡が上面に重複していた。遺物は、覆土内から弥生土器片、石包丁、砥石等が出土したほか、南壁沿いの床面付近で完形の鉢 (第9図の4) が出土している。

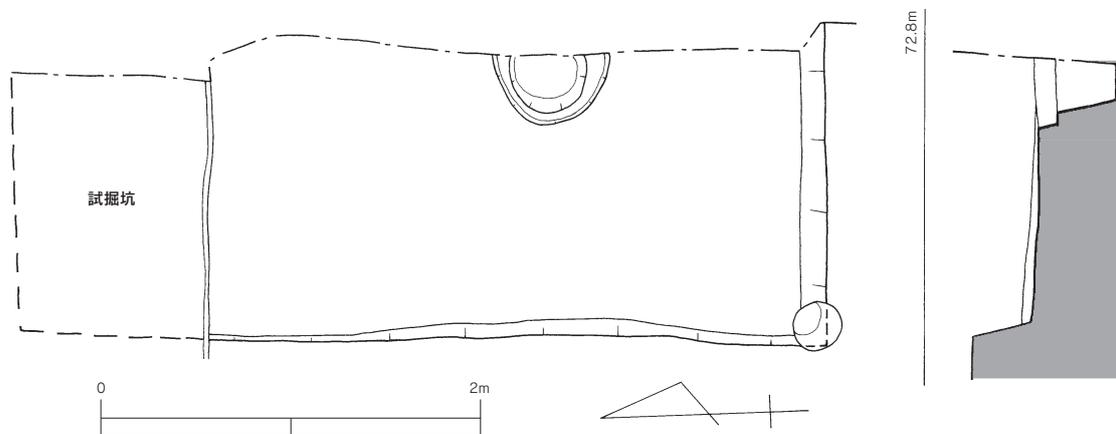
**4号竪穴住居跡** (図版2 第6図) 調査区の東側に位置する方形竪穴住居跡で、壁高は25cm前後を測る。床面上には、炭化物を含む層が全面に10cm程の厚さで堆積していた。西側の1号竪穴住居跡と北側の土坑とは重複関係にあり、本住居跡の大半は削平を受けている。遺物は覆土内から弥生土器片、砥石等が出土したほか、床面より10~20cm上位で、甕 (第10図の4)、壺 (第10図の10)、敲石 (第15図の24)、砥石 (第15図の25・29) が出土している。

**土坑** (図版3 第6図) 長軸1.5m程の不整形の土坑で、4号竪穴住居跡と2号竪穴住居跡とは重複関係にある。遺構の大半は2号住居跡により削平を受けている。遺物は、南壁面沿いに丹塗りの壺 (第11図の2)、鉢 (第11図の4)、大型の砥石 (第15図の26) が出土している。

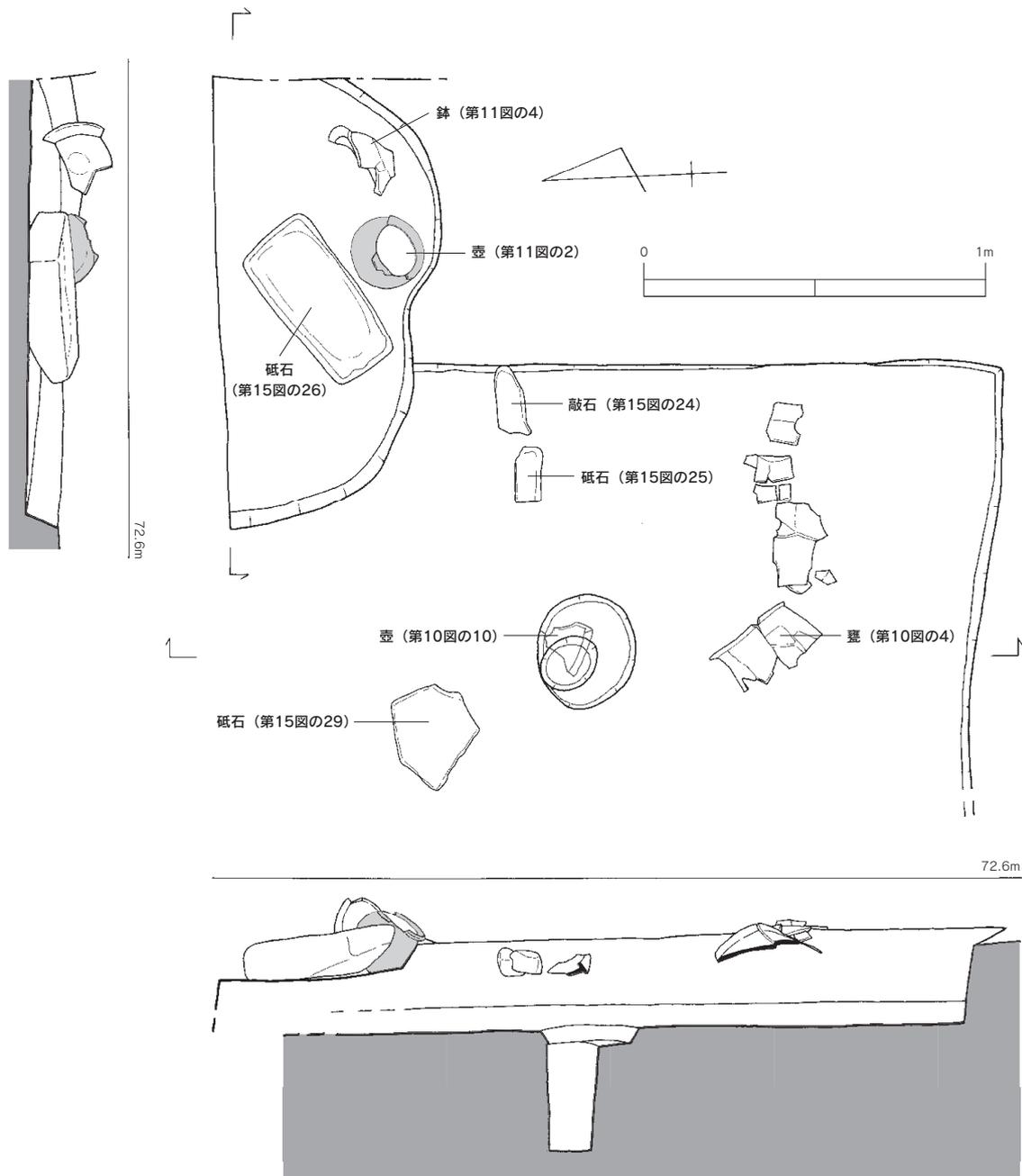
その他、4号竪穴住居跡南隣の直径50cmのピットからは、甕 (第11図の1) が出土した。



第4図 1号竪穴住居跡実測図 (S=1/40)



第5図 2号竪穴住居跡実測図 (S=1/40)



第6図 4号竪穴住居跡・土坑実測図 (S=1/20)

(4) 弥生時代の遺物

① 1号竪穴住居跡出土土器 (図版4・5 第7・8図)

**甕** (1~16) 1は如意形口縁を呈すが、口縁端部までが短く逆L字状に近い。頸部には1条の沈線文を施し、外面は縦位のハケメ、内面をナデによって仕上げる。2~5は逆L字状口縁を呈すもので、2は全体に丸味をおび頸部内側に若干突出した形状である。3は典型的な逆L字状を呈し、頸部下方に1条の沈線文を施す。胴部へのラインは直線的にのび、外面は縦位のハケメ、内面をナデによって仕上げる。4は口縁端部が短く、頸部ラインは丸味のある胴部を予想させる。外面は縦位のハ

ケメ、内面をナデによって仕上げるが、一部に指頭痕が残る。5は全体に丸味を持つがやや外反し、頸部の内外面に連続する指頭痕が残る。6・7は跳ね上げ口縁を呈し、共に口縁端部を丸く納めるもので、6は口縁端部の先端全体に粘土を接合し上端部をつまみ出す。7は跳ね上げ部分のみ粘土紐を接合している。8は匙面状の口縁部を呈し、丸く納めた口縁端部に1条の沈線を施す。頸部内面は鋭く稜線が巡る。9は屈折口縁で口縁端部が直線的になり上端がやや鋭利で、頸部下方には2条の沈線を1.5cmほどの間隔で施す。外面は縦位のハケメ、内面をナデによって仕上げる。10は逆L字に近い屈折口縁で、外反する胴部へのラインは胴部の最大径が口縁部径と同じかやや上回る可能性を示す。頸部下方に2条の沈線文が見られるが途切れ乱れているため全周するものではない。11は6・7同様に跳ね上げの口縁で、端部をつまみ上げて鋭利に仕上げ、頸部には三角突帯文を1条付す。12は跳ね上げ口縁気味に口縁端部が立ち上り、下部を若干引き出すことで幅を持たせ、中央がやや窪む程のナデで仕上げる。13は屈折口縁で口縁端部を丸く納め、頸部より若干下部に1条の三角突帯文を付す。最大径は胴部のやや上部にあって、そこから13cm程下がった所に1孔をあける。14～16は甕の底部で、14は厚底で外部が細くしまって上げ底をなす。15・16も厚底であるが底部のしまりは弱くなり、若干の上げ底をなす程度である。3点の何れもが外面をハケ目で仕上げるが、15のみが底部より2cm程の部分に横ナデを施しハケメを消している。

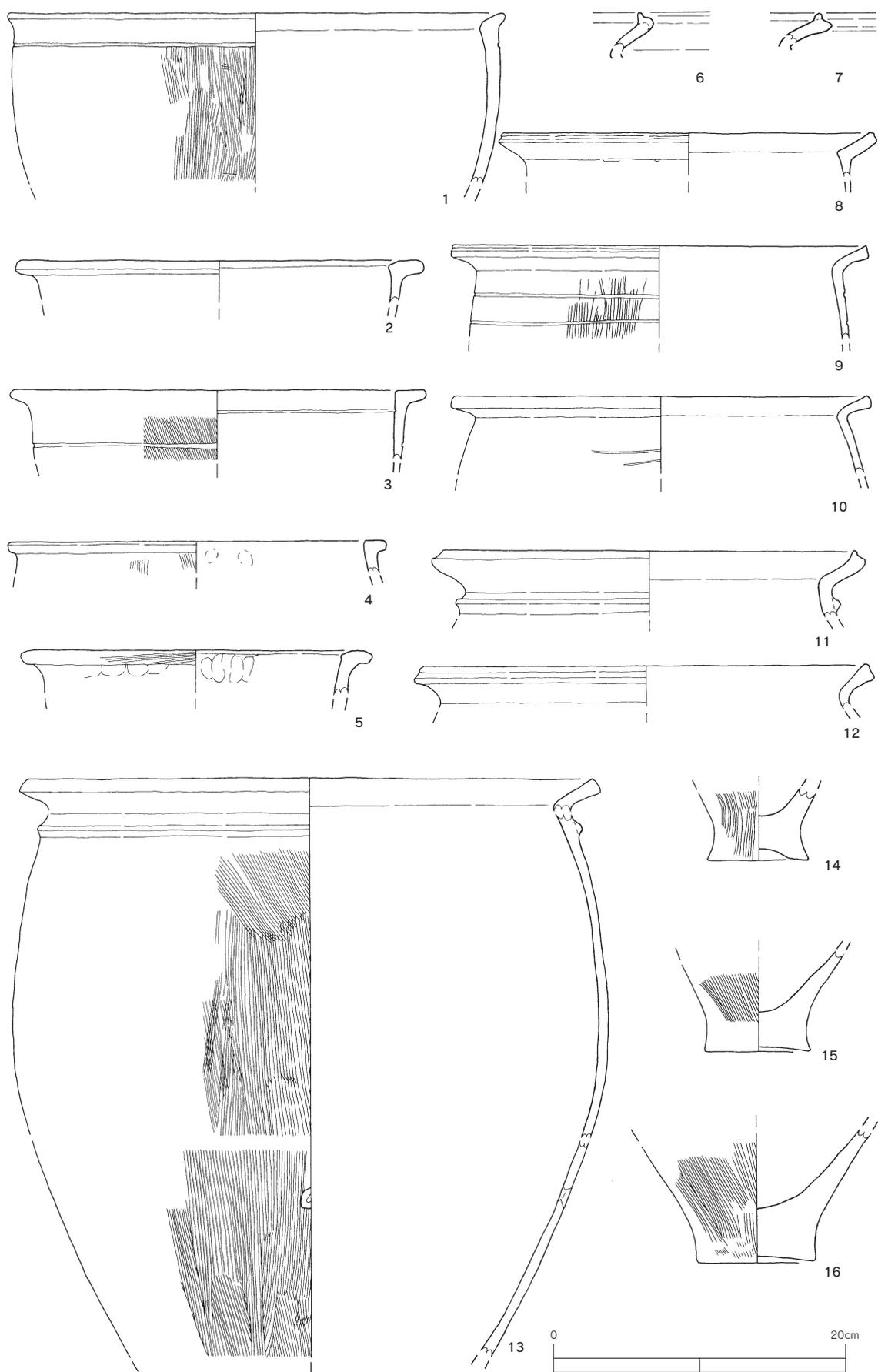
**壺** (17～23) 17～19は鋤先口縁で17は厚みのある短い口縁が特徴である。18・19は逆L字状にやや長くのびてはいるが、内面の突出はほとんどない。19の胴部は球形を呈し最大径の上部に三角突帯文を付す。内外面の調整はミガキであり、口縁部から頸部にかけて外面は縦位、内面が横位で頸部以下は内外面共に横位である。20～23は広口壺で、20は壺の口縁が肥厚するタイプで7に近く、下端を丸く納めるが上部は肥厚した粘土を強くナデ、貼り付けているため浅い沈線状に窪む。21は全体に厚く口縁端部を強くナデで仕上げる。22は器壁が薄くラッパ状に広がり、口縁端部がやや肥厚する。外面は一部に斜位のハケメが残る。23は壺の肩部で、1条のコ字状突帯を付し強くナデ押えることで2条の三角突帯文に見せている。

**無頸壺** (24～26) 24が丹塗磨研で口縁端部内面を張り出させ、コ字状突帯文を1条巡らす。25は口縁端部よりやや下方に2条の三角突帯文を巡らす。26は口縁端部より三角突帯文を配し、外面をミガキで仕上げている。

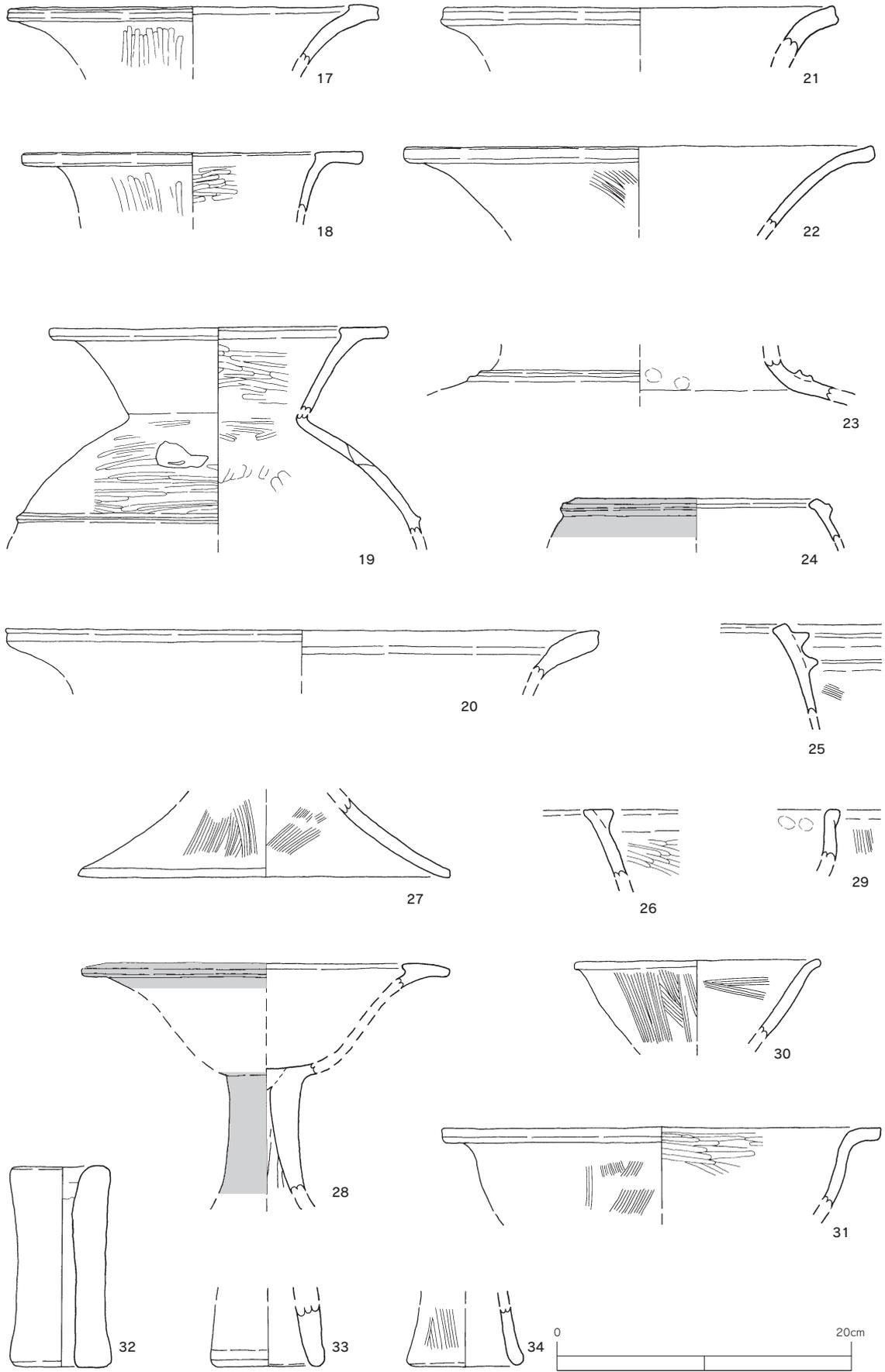
**蓋** (27) 甕の蓋になり薄手でラッパ状に広がる。外面は丁寧なハケメ、内面はナデによって仕上げる。

**高杯** (28) 丹塗磨研で鋤先口縁を呈す。口縁部は若干下り気味となるが短く納められ内面の突出も小さく古式感を示している。

**鉢** (29～31) 29は口縁端部が粘土の折返しのように肥厚するが、外面のハケメ調整ラインが横に一直線上となり、それが肥厚の原因かと思われる。30は口縁部が外反気味で口縁端部を丸く納め、胴部は直線的にすぼまる。外面は縦位のハケメを連続的に使用し、内面は上部に横位のハケメを残す。31は口縁部が如意形と逆L字状の中間的形狀を呈し、上部がやや膨らむ胴部を有す。外面は一部にハケメを残し内面は横位のミガキで仕上げている。



第7图 1号竖穴住居跡出土土器実測图1 (S=1/4)



第8图 1号竖穴住居跡出土土器实测图2 (S=¼)

**支脚** (32・33) 32は器壁が厚く胴部が緩やかに内湾する。33はやや薄手で裾部付近に明瞭ではないが段状のラインが入る。32・33共にナデで仕上げている。

**器台** (34) 胴部へのラインは内湾しており、形状はつづみ形と推定され、外面は縦位のハケメ、内面をナデで仕上げる。

② 2号竪穴住居跡出土土器 (図版4・5 第9図)

**高杯** (1) 丹塗磨研で鋤先口縁を呈す。口縁部は長く若干下り気味となり、内面も明確に突出する。

**甕** (2) 直線的な口縁部に方形の粘土を貼り付け、口縁上部と下部を指頭で押さえ、さらに、前部をハケメにより調整して方形につくり出し、その固定化を図っている。口縁部の特徴から楽浪系深鉢 (花盆形) を想像させるものの、焼成や胎土が異なり、表面調整がハケメである点から弥生土器の範疇となろう。

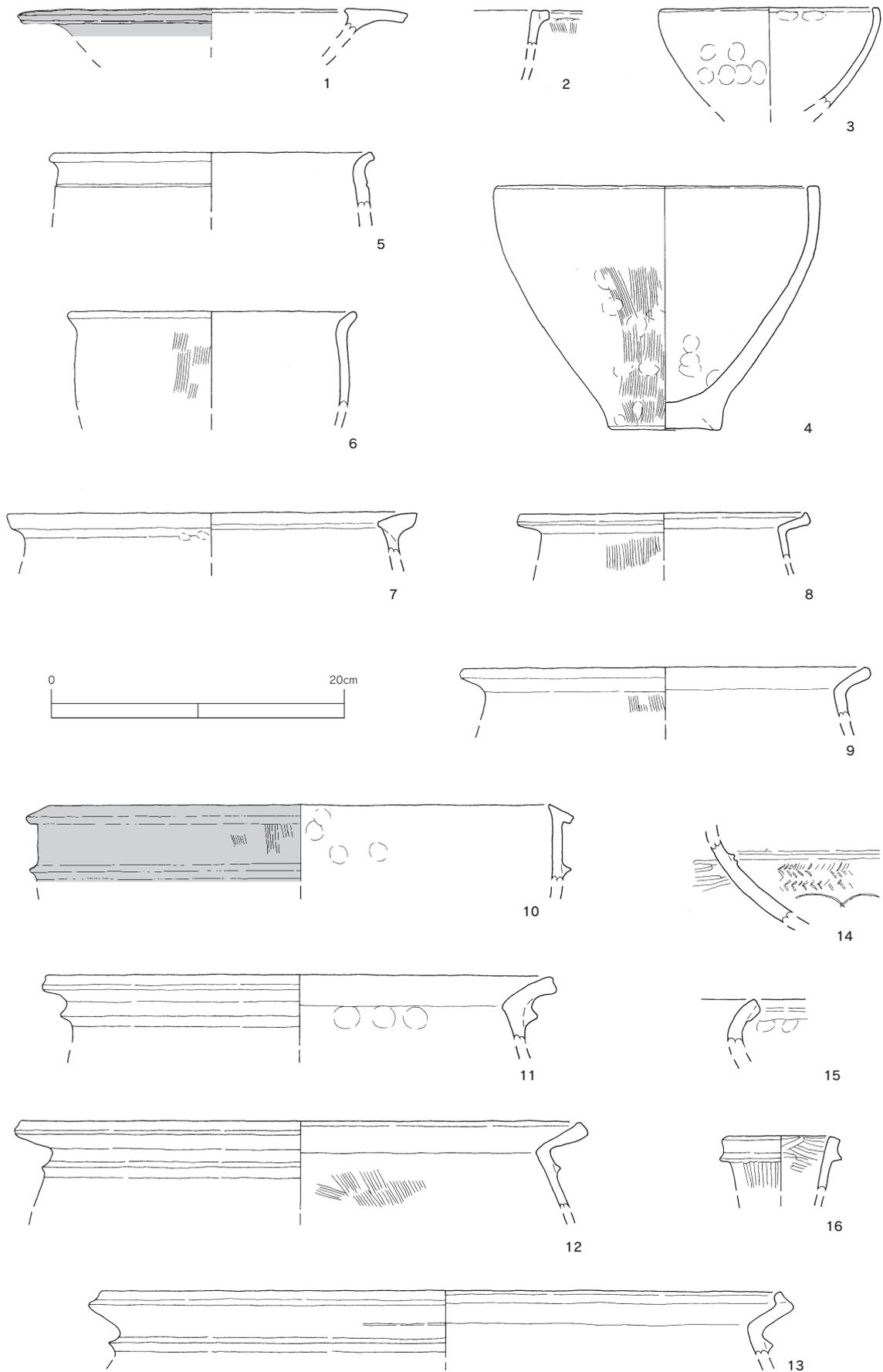
**鉢** (3・4) 3は口縁部が内湾気味で口縁端部は直線的に仕上げている。内外両面に指頭痕が残る。4は直立する口縁とその端部を直線的に整え、半裁した壺の下半部形状を呈す。内外両面に指頭痕を残し、外面は縦位のハケメ、内面はナデで仕上げる。

**甕** (5～13) 5・6は如意形口縁を呈し口縁端部は角張る。5は頸部直下に1条の沈線文が巡らせ内外両面共にナデによって仕上げる。6は外面をハケメ、内面はナデで仕上げる。7は厚い逆L字状を呈し、口縁端部を鋭利な直線ラインとして口縁上部を内傾させ、内面に突出部をつくり出す。8は跳ね上げ口縁で端部をつまみ上げて若干内傾させる。器壁は薄く外面をハケメ、内面はナデで仕上げる。9は屈折口縁で口縁端部を丸く納め、外面をハケメ、内面はナデで仕上げる。10は丹塗磨研で鋤先口縁を呈すが、口縁部はかなり短く下方に傾斜し内面側に突出させ、口縁下部に三角突帯文が巡らす。10は短い鋤先口縁で口縁端部にナデによる浅い沈線状の窪みを巡らせ、頸部には三角突帯文1条を付す。12は跳ね上げ口縁に近似し、頸部よりやや下方に三角突帯文を1条巡らす。調整は内面にハケメを残す。13は三角突帯状の粘土を付して跳ね上げ口縁をつくり出し、頸部よりやや下方に三角突帯文を1条巡らす。

**壺** (14～16) 14は壺の肩部で頸部との境に1条の三角突帯文を巡らせ、その下に不鮮明ながら無軸羽状文を2段と連弧文を1段配している。調整は内外面ともにミガキによって仕上げる。15は如意形口縁壺の口縁部で、端部に粘土を貼付け厚みを持たせた上にキザミメを施す。16は長頸壺の口縁部で直下に三角突帯を1条巡らす。内外面の調整はミガキが施されている。

③ 4号竪穴住居跡出土土器 (図版5 第10図)

**甕** (1～7) 1・2は如意形口縁で口縁端部が角張る。1は頸部に指頭痕があり、内外両面にハケメが見られる。2は頸部直下に1条の細い沈線文を巡らし、内外両面にはナデによる仕上げがなされる。3は短い逆L字口縁を呈し、口縁上部は水平で内側にわずかに突出する。口縁下部に粘土接合時の指頭痕が連続する。5は跳ね上げ口縁で端部を垂直につまみ上げている。6は屈折口縁で口縁端部をナデにより丸く納める。7は屈折口縁で6に比べ薄くて口縁端部もかなり丸く、跳ね上げ口縁気味に湾曲している。



第9图 2号竖穴住居跡出土土器実測図 (S=¼)

**鉢**（8・9） 8は口縁部が直立するもので、椀形の丸みを持っている。口縁端部はハケメによって調整され、内外両面共にミガキによって仕上げる。9は内湾した口縁部にコ字状粘土を貼付け方形とし、全体の形状は樽型と考えられ、外面は縦位のハケメ、内面を横位のミガキで仕上げる。

**壺**（10・11） 10は直線的な鋤先口縁で長くのびず、内側の突出はやや上方にのびる。内外両面共にミガキで仕上げ、口縁部内外に赤色顔料が残っている。11は底部であまり開かず胴部へとのびており、肩部が張るタイプで外面を縦位のハケメで調整した後に同方向のミガキを加え、内面はナデで仕上げる。

④4号竪穴住居跡南隣ピット出土土器（図版4 第11図）

**甕**（1） 頸部内面が丸味をおびた屈折口縁を呈し、口縁端部も丸く納める。最大径は胴部上半にあってやや張り出す。外面は縦位のハケメ、内面をナデで仕上げるが上部に指頭痕が残る。

⑤土坑出土土器（図版5 第11図）

**無頸壺**（2） 丹塗磨研で屈折口縁を呈す。外面はミガキ、内面をナデで仕上げるが胴部に指頭痕が残る。

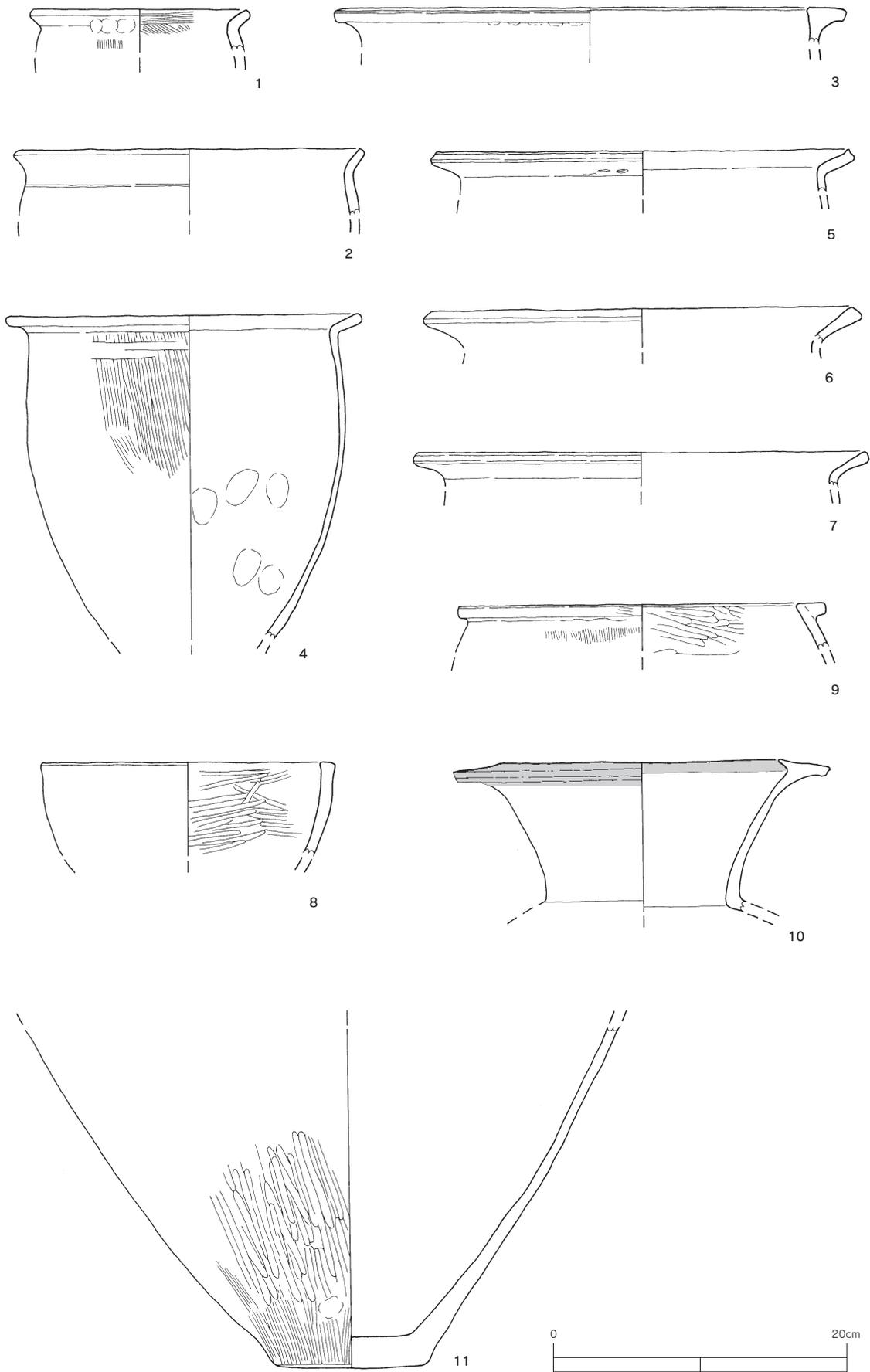
**甕**（3） 薄い平底で底部に通じる胴部ラインは、若干内湾する。外面は縦位のハケメ、内面はナデで仕上げるが一部に指頭痕が残る。

**鉢**（4） 逆L字状にややのびる口縁の端部は丸く納め、胴部が少し張るものの底部は広めの平底を呈す。外面は丁寧な縦位のハケメ、内面はナデで仕上げるが、胴部下半に指頭痕が残る。

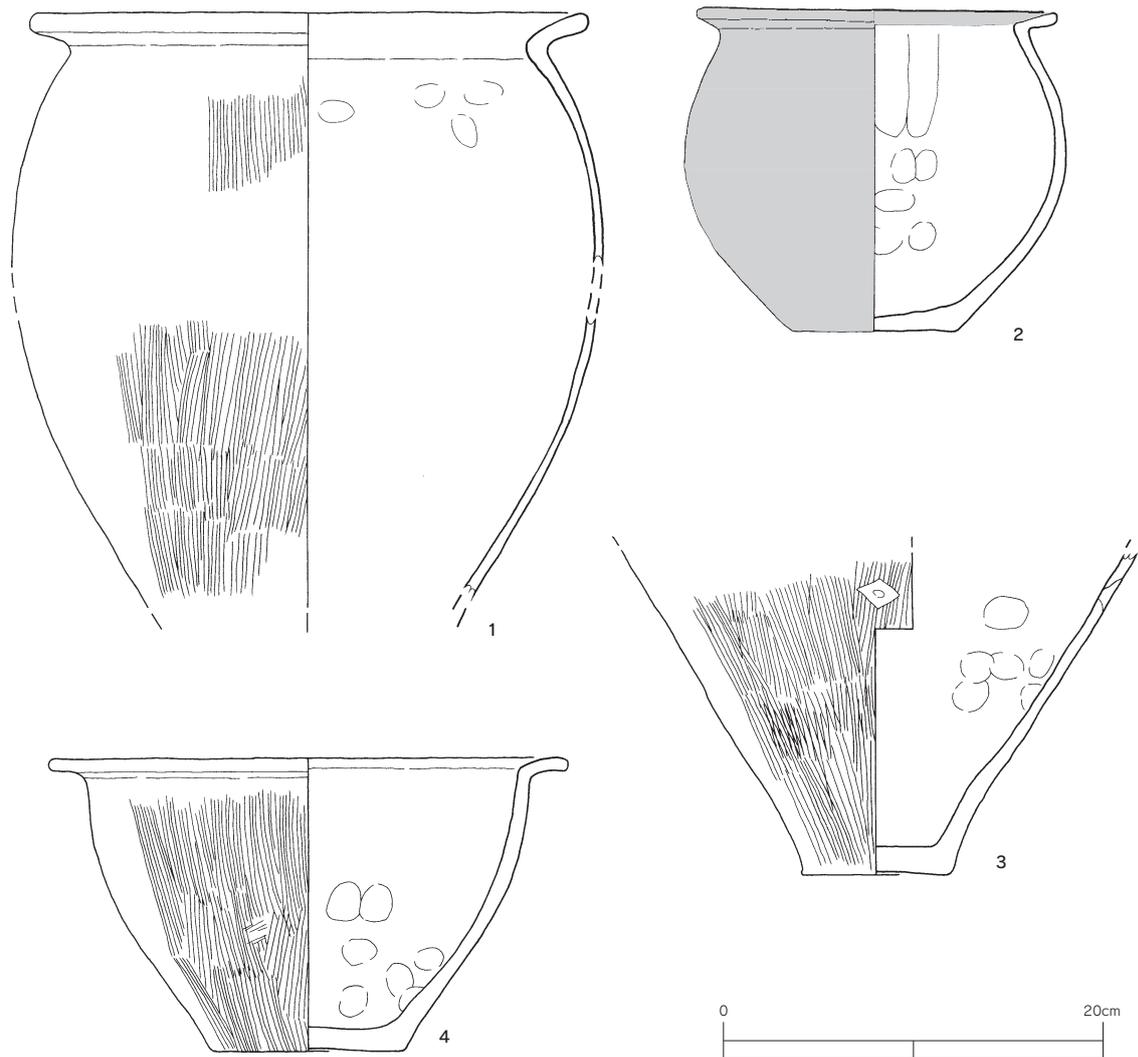
⑥試掘・包含層出土土器（図版4・5 第12図）

**壺**（1～5） 1は口縁下部に粘土帯を貼り付け、内外両面をミガキにより口縁部をつくり出している。2・3は広口壺の口縁で、2は口縁端部を上下につまみ出し、中央部を強くナデることによって仕上げ、内外両面にはミガキを施す。3は口縁部がラッパ状に広がり、口縁端部の角をナデにより丸味を持たせる。4は丹塗磨研の無頸壺と考えられ、口縁端部を鋭利に仕上げ胴部に向かって緩やかに外反し、口縁下部に1条のコ字状突帯文を巡らしている。内面はナデ、外面はミガキによって調整する。5は丹塗磨研の頸部付近で2条のコ字状突帯文を付す。

**甕**（6～12） 6は屈折口縁で口縁端部はナデによって角張り、内部の屈折部は稜線を呈す。外面は縦位のハケメ、内面をナデで仕上げる。7は口縁部が匙面を呈し、頸部は丸みを持って屈曲する。8は7同様に匙面を呈す口縁部だが、より長く外方に張り出し、頸部直下に三角突帯文を1条巡らせる。9は逆L字状口縁を呈し、頸部より下方に三角突帯文が1条巡り、やや古相を示す。外面は判然としないが内面をナデで仕上げる。10は厚みのある屈折口縁で内部の屈折部は稜線を呈す。口縁端部には幅5mm程度の凹線が巡っており、凹線文を連想させ、内外両面ともにナデで仕上げる。11は跳ね上げ口縁で端部をつまみ上げ三角突帯状の突起をつくり出し頸部直下に三角突帯文を1条巡らす。外面は縦位のハケメ、内面をナデで仕上げるが上部に横方向のハケメや指頭痕が残る。12は屈折口縁と推定され内面の屈折部は稜線を呈し、頸部直下に2条の三角突帯文を巡らす。外面は縦位のハケメ、内面をナデで仕上げるが上部に指頭痕が残る。



第10图 4号竖穴住居出土土器实测图 (S=¼)



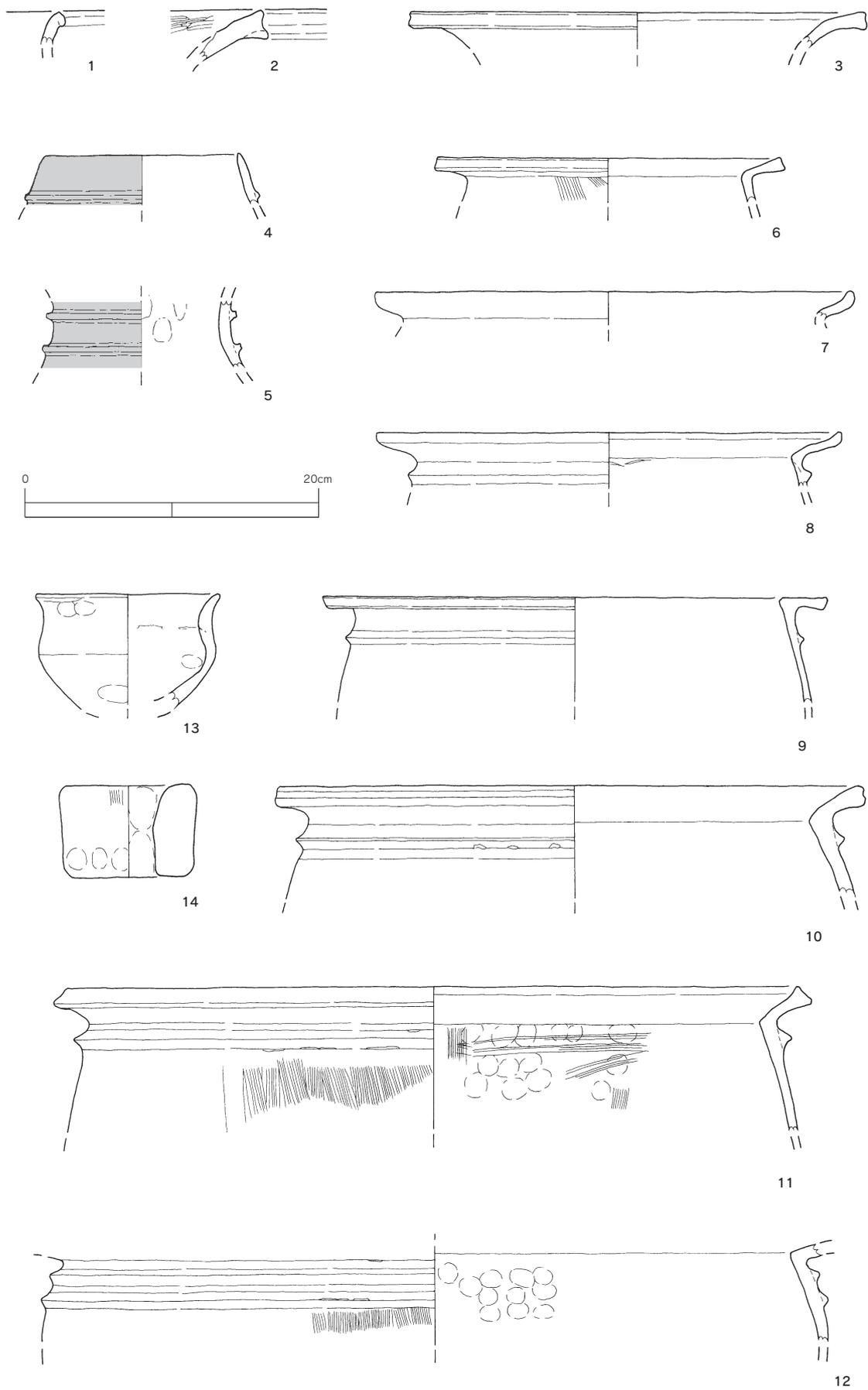
第11図 ピット・土坑出土土器実測図 (S=¼)

**鉢 (13)** 口縁部は外反し端部はやや厚みを持って下方約5mmにわずかに段が見られる。頸部は緩やかに内湾しながらやや張り出した胴部へと続く。肩部には判然としないが稜線のラインが見られるようで、底部は厚みがあってそのラインは丸底を推定させる。色調は全体に淡い薄褐色を呈すが肩部の一部や底部あたりは灰色である。胎土は良質の粘土に細かい石英や金雲母がまばらに含まれ、焼成も良好である。頸部から口縁部にかけて粘土の接合の痕跡が見られ、内外両面共にナデかミガキによって調整されているようであるが、全体に洗い過ぎのため判然としない。瓦質土器との関連が予想される。

**支脚 (14)** 高さ3cm程とかなり低いが、厚みや調整等は通常のものと同じである。

⑦遺構及び試掘・包含層出土石器・土製品 (図版6・7 第13~15図)

**磨製扁平片刃石斧 (1・2)** 共に蛇紋岩製である。1は1号竪穴住居跡出土で、表面に石材加工痕を明瞭に残しており、整形と調整が分かる資料である。基部から側縁部にかけて石材を扁平化するために大きく整形剥離を施し、その後に側縁部から刃部にかけて調整剥離を行っている。通常、研磨の進



第12図 試掘・包含層出土土器実測図 (S=¼)

捗状況から未製品と捉えられようが、刃部に使用による欠損があり、概ね形状が整ったところで使用しているようである。2は試掘時に出土したもので、製品として使用されたため刃部を大きく破損し廃棄されたものである。

**磨製蛤刃石斧（3）** 試掘時に出土したもので、緑色の砂岩製で胴部から破損する。両側縁は平行し直線的で、断面形はややいびつな楕円形を呈す。

**打製石斧（4）** 3号竪穴住居跡覆土内の出土で、片岩系の原材を使用した撥形の扁平な打製石斧で、使用により途中より破損したものと考えられる。

**磨製石庖丁（5～8）** 5～7は、何れも赤紫色の輝緑凝灰岩製品で外湾刃の半月形を呈し、両刃で穿孔部分から欠損している。5・6は共に2号竪穴住居跡の出土で、端部を研ぎ出し穿孔は両面の敲打後に穿孔具を使用している。7は1号竪穴住居跡の出土で、5・6に比べ薄手でやや大きく整った半月形を呈す。8は青灰色頁岩製の未製品で、第2工程終了時の研磨前段に相当する。当初、背面右斜め下の方向から打面を調整した後に全体を剥ぎ取る。その後、背面は自然面を左側下部より大きく剥した上で、上面と右斜めから整形剥離し上面を直線的に、右斜めの打面部は外湾刃形に作り出し、最後に下部に刃部湾曲面を作るため調整剥離を施す。主要剥離面は、打面下部のバルブの厚みを整える整形剥離を施して刃部を調整している。

**土製投弾（9）** 3号竪穴住居跡覆土内の出土で、ラグビーボール状を呈し、先端の一部が欠けていて、断面形はほぼ円形を呈す。

**磨製石剣（10）** 3号竪穴住居跡覆土内の出土で、石材は砂質頁岩製で先端と基部が大きく破損した身部片で鎬が通る。断面形は横長の菱形を呈したと考えられる。

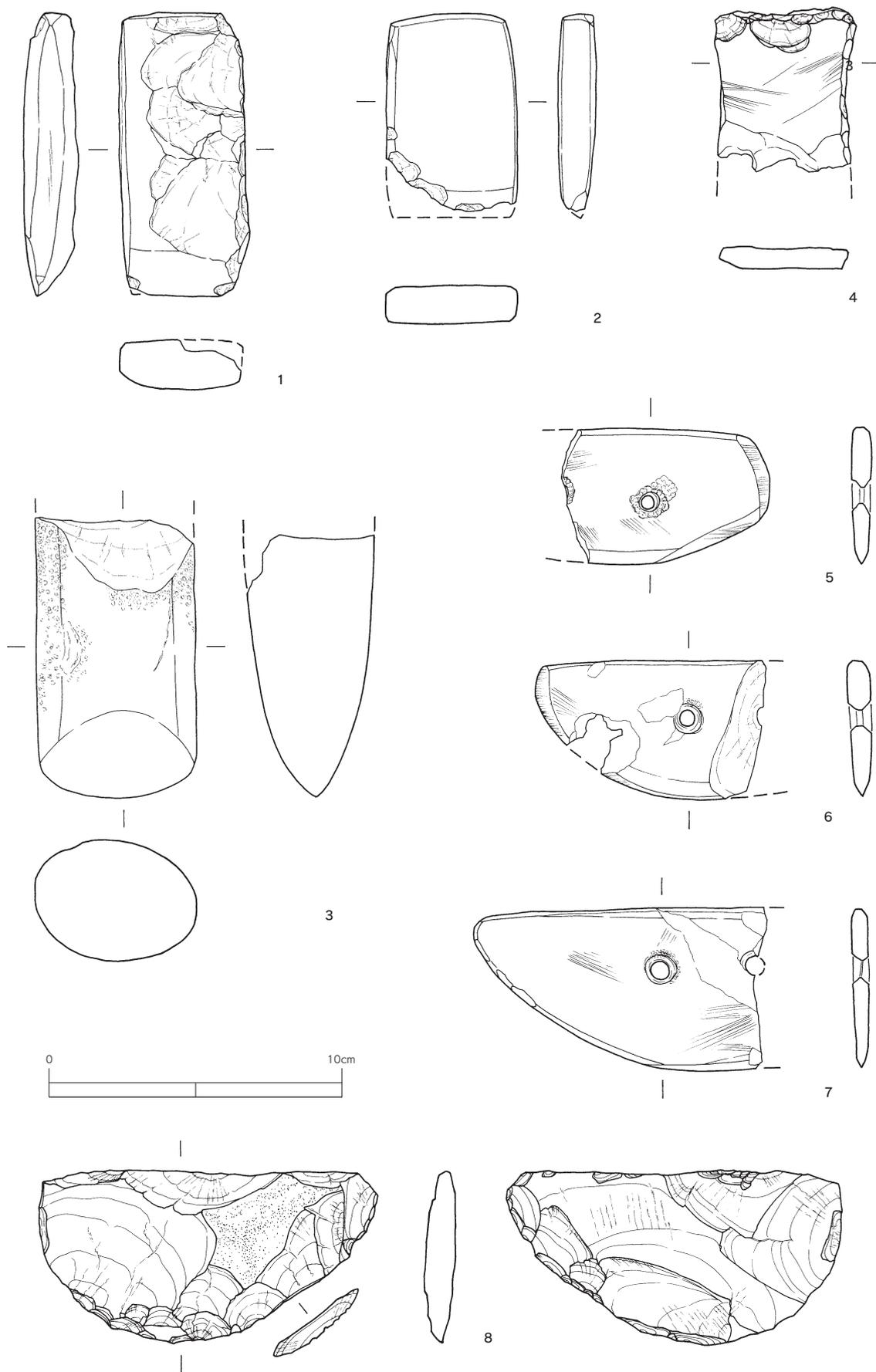
**磨製石鏃（11）** 包含層の出土で、蛇紋岩製で先端と基部が欠損しており、両側縁は両面より刃部が形成される。

**磨製石剣状石器（12～18）** 何れも蛇紋岩製で、製品と未製品が存在する。12はヘラ状で中央に最大幅を有し両側縁と基部は平坦に面取りし、先端は潰れた感じである。縦断面を観察すると先端が両面から薄く仕上げられている。13は石剣あるいは石鏃と同様の形状を呈し、最大幅は基部である。仕上げは12と同じで両側縁と基部は平坦に面取りするが、先端は薄く尖頭状に仕上げる。ただし、先端は潰れた感じで鋭利ではない。17は12に近く身部が張り出す形態で、14～16・18は13のタイプに近い。14～18は製作途中に破損した未製品と把握しているが、これらの用途に関しては不明であり、名称も仮称である。13と15が1号竪穴住居跡内、12が2号竪穴住居跡内、14・16・17・18が4号竪穴住居跡内から出土している。

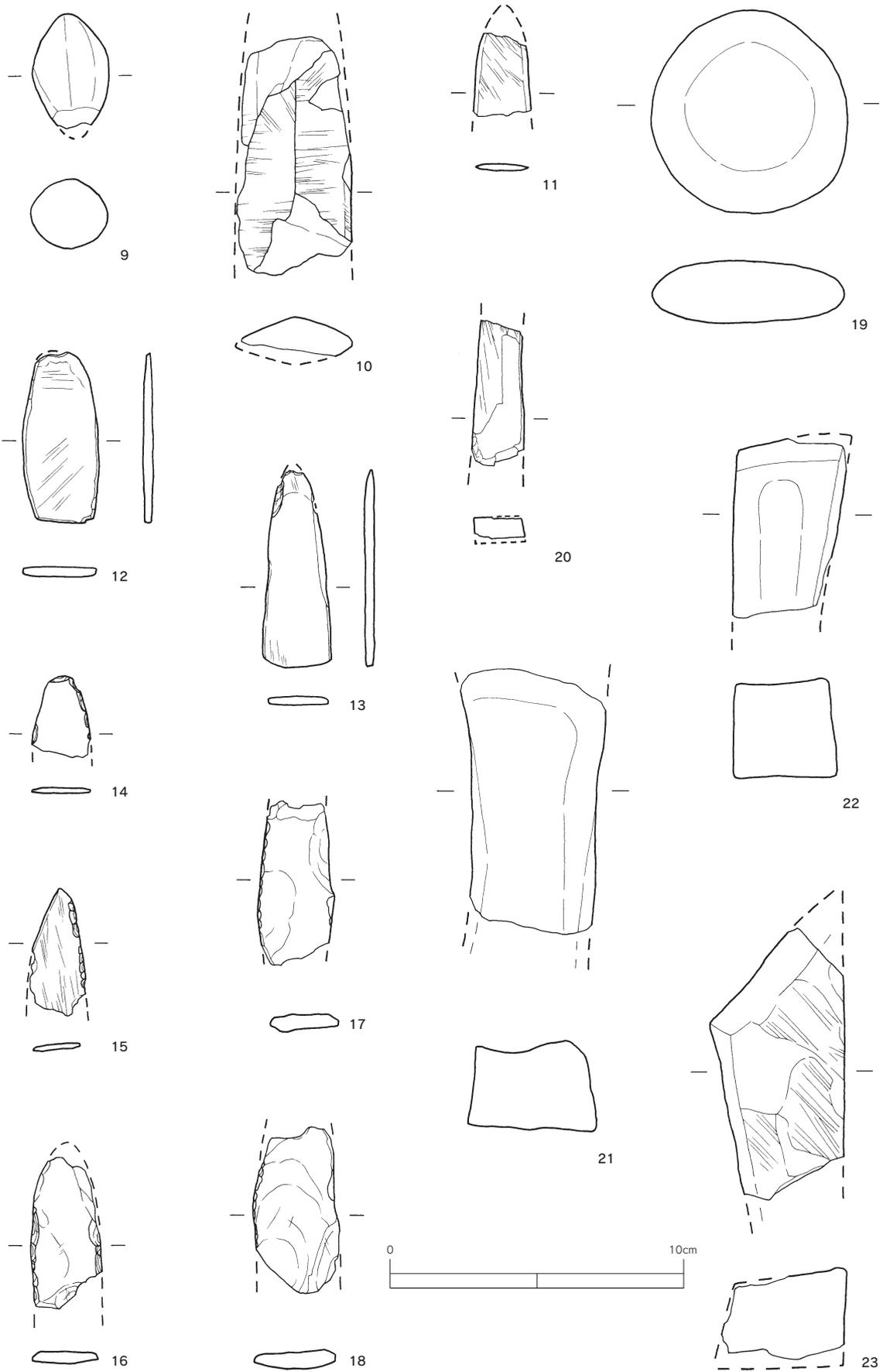
**磨石（19）** 試掘時の出土で、ほぼ円形の扁平礫を利用しており、中央付近には使用痕が残る。

**砥石（20～23）** 20は3号竪穴住居跡覆土内出土の細粒砂岩製で、両側縁が使用面となる。21は遺構外出土の砂岩製で裏面の一部がやや黒くなる。22は2号竪穴住居跡出土で21と同質の砂岩製の折れたものを再利用している。20～22は手持ち用と考えられ中程度の砥石である。23は4号竪穴住居跡出土でシルトあるいは泥岩の砥石で仕上げ用であろう。

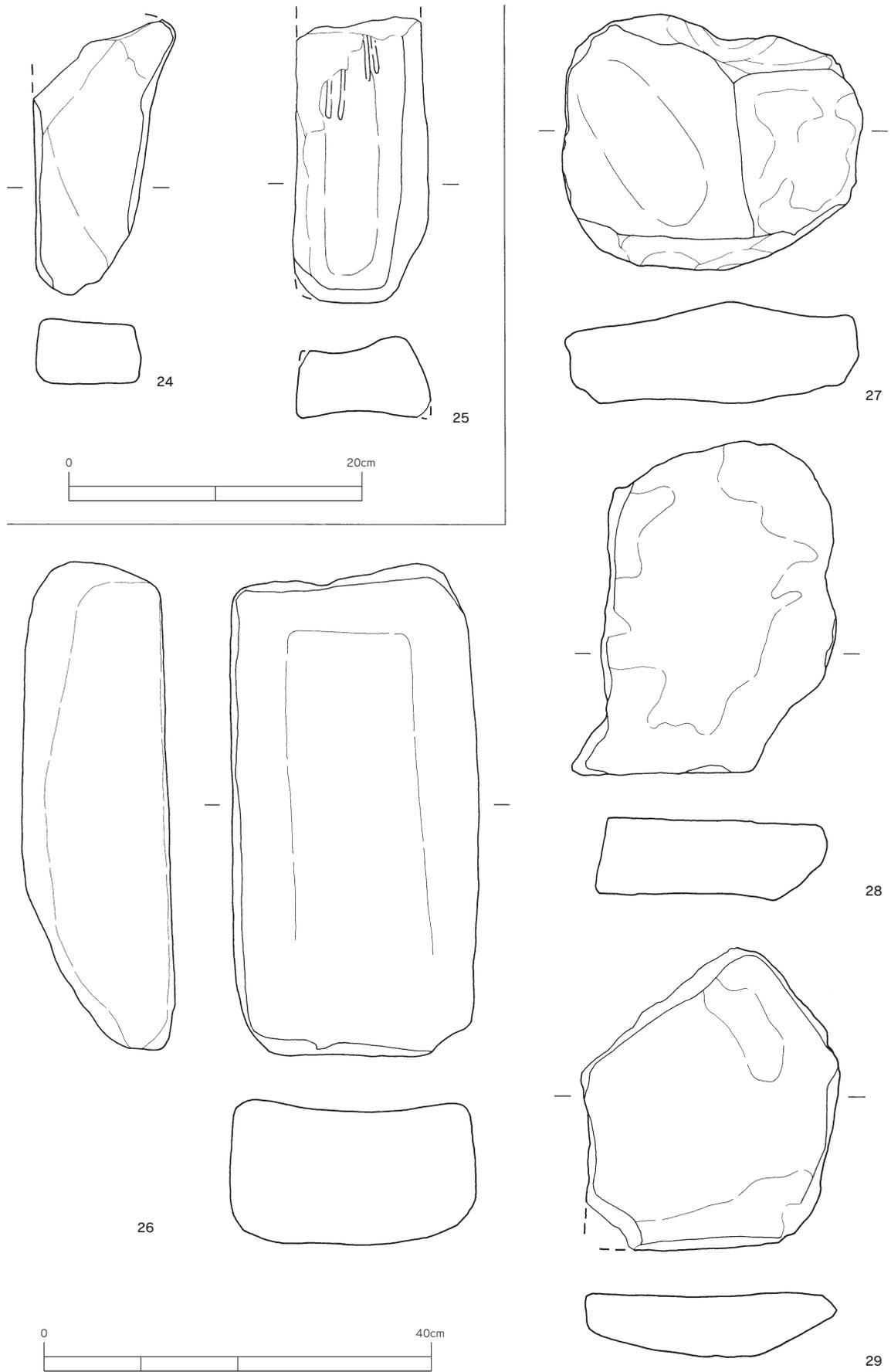
**敲石（24）** 4号竪穴住居跡出土の硬質で重い安山岩系で右先端と凹面部に敲痕が見られる。



第13图 石器实测图1 (S=1/2)



第14図 土製品・石器実測図 (S=½)



第15图 石器实测图2 (S=¼、½)

**砥石** (25～29) 大型の置砥であり、25は4号竪穴住居跡出土の細粒砂岩製で3面を使用しており、上部の一部が破損する。26は土坑出土で長さ約50cm、幅約25cmの長方形を呈し、全体に加工を加え整形する。最も使用した上部は長方形に窪み、ちょうど、扁平片刃石斧を横にした状態でピタリとはまる形状から、主にその研磨を行ったと考えられる。石材は花崗岩系で粗砥である。27～29は何れも砂岩製で不正形の形状を呈しているが、周囲を加工して25×30cm程度の大きさに仕上げている。27・28が1号竪穴住居跡、29は4号竪穴住居跡から出土したものである。

## 小 結

1号竪穴住居跡出土土器は複数型式が混在しており、内訳は板付ⅡC<sup>(1)</sup>～城ノ越式(1～5、14、17、20、21、29、30)、須玖Ⅰ式(8、9、15、16、18、19、22、28、31～34)、須玖Ⅱ式(6、7、11～13、23、24、25～27)に区分され、住居跡の時期は、最も新しい須玖Ⅱ式の範疇で把握されよう。4号竪穴住居跡出土土器は、板付ⅡC～城ノ越式(1～3)と須玖Ⅱ式(4～11)とに区分され、住居跡の時期は須玖Ⅱ式と考えられる。1・4号を比較すると4号はやや古相を呈し、切合い関係との矛盾はない。4号竪穴住居跡南隣のピットから出土した甕は口縁部がくの字に近づき、胴部最大径が中程にある点から須玖Ⅱ式の新しいタイプと考えられる。土坑出土土器は、薄底の甕や底部径が広い鉢などから、ピットと同時期の土坑と考えられる。

試掘・包含層出土土器は概ね須玖Ⅱ式の範疇であり、古相と新相が含まれる。13の丸底の鉢は、形態や胎土において瓦質土器に近似する。しかし、武末純一氏は筑後の狐塚遺跡1号住居から出土した類似の土器が古式の瓦質土器に類似しながら、弥生後期後半を遡らない状況をもって齟齬をきたすとし、その検討を促した<sup>(2)</sup>。その後は、後期後半から終末の在地土器<sup>(3)</sup>として取り扱われているようである。後述のように当遺跡では、布留式古相の土師器群が出土しており、その時期まで存続するならば、南筑後との関係を大いに考慮する必要があるだろう。また、須玖Ⅱ式に伴うとすれば韓半島を意識することとなるが、前者の可能性が高いであろう。

また、石器等については、特に、蛇紋岩を使用した扁平片刃石斧及び磨製石剣状石器の製作が特徴的で、大・中・小の砥石で、粗砥・中砥・仕上げ砥の3種がそろい、粗砥は加工を加え長方形や不正形ながら大きさをそろえるといった工夫が見られる。蛇紋岩製の扁平片刃石斧や石剣状石器の加工は、千手盆地の西端に位置するアナフ遺跡<sup>(4)</sup>でも確認されており、弥生中期後半という同時期を示している。磨製石包丁に関しては出土数6点中1点のみ青灰色の頁岩で残りは全て輝緑凝灰岩である。また、青灰色頁岩製は未製品であるが、工程上は研磨と穿孔に十分なもので、欠損等は見受けられない。また、石材の特徴は宮若市の笠置山麓を流れる八木山川に露出する頁岩に類似する<sup>(5)</sup>。

## (5) 古墳時代以降の遺構

**3号竪穴住居跡** (図版3 第16図) 調査区の西側に位置する1辺3.1mの方形竪穴住居跡で、壁高は30cm前後を測る。床面では2つの柱穴を確認するが、西側半分は調査区外にあたる。また、北西側の調査区壁面付近で床面直上に粘土塊、床面より26cm上位で焼土塊、柱状の石材を検出した。いず

れも破壊を受けたカマドに伴う残骸とみられる。遺物は覆土内から弥生土器・石器、須恵器、土師器が出土している。報告資料のうち、甑の把手（第18図の5）、甕（第18図の8）以外は全てカマドがあったと推定される北西側から出土したものである。

#### 掘立柱建物跡（図版3 第17図）

調査区の中央南側に位置する。2間×3間以上で東西方向に主軸をとる掘立柱建物跡と考えられるが、西側は調査区域外となる。柱間は180cm前後、柱穴の直径は26cm前後を測る。柱穴の覆土内には、少量の弥生土器小片が混入するのみで、建物跡の時期を示す遺物は出土していない。

#### （6）古墳時代以降の遺物

##### ①3号竪穴住居跡出土土器（図版8 第18図）

**須恵器杯身**（1・2） 共に口縁部片で内湾気味に立ち上がり、受部から口縁端部までは短い。

**土師質甕**（3） 土師質であるが器壁は薄く焼成は良好で硬質である。外面はタタキ、内面には当て具痕が明瞭に残る。

**土師器杯**（4） 口縁部が緩やかに外反し底部付近は丸味帯びた平底と思われる。外面はミガキ、内面はナデで仕上げる。

**土師器甑の把手**（5） 牛角状を呈し全体にヘラケズリをもって仕上げる。

**土師器壺**（6） 口縁部は緩やかに内湾するが直立に近く、胴部以下は整った半球状を呈す。内外両面共にヘラミガキを使用し、外面下半部はヘラケズリで仕上げる。

**土師器甕**（7～9） 7は小形甕で口縁部は外反し頸部内面に稜線が巡り、球形の胴部は丸底となる。外面は縦位のハケメ、内面は上半部をナデ、下半部はヘラケズリで仕上げる。8は大形甕で緩やかに外反する口縁部に胴部ラインも緩やかに広がる。外面は縦位のハケメ、内面はヘラケズリで何れも頸部下より施される。9は大形甕の胴部下半で球形を呈し、底部は緩やかに湾曲する平底をなす。外面はナデ、内面をヘラケズリで仕上げる。

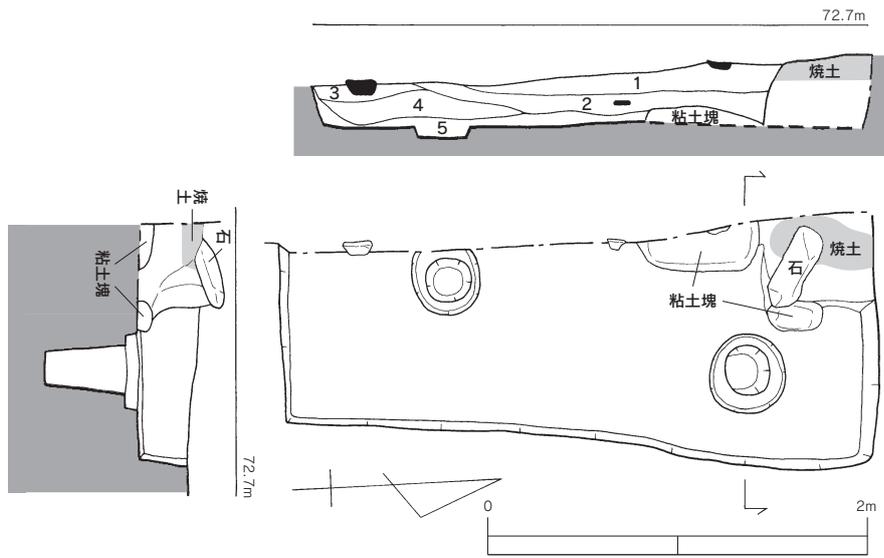
##### ②試掘・包含層出土古式土師器（図版9 第19図）

**甕**（1・2） 1は口縁端部が内側にわずかに三角状に突出し、口縁部がやや内湾する。2は、くの字状の頸部からなで肩の肩部付近で、外面は横方向のハケメ、内面は上部にハケメが残るものその下からヘラケズリが施される。

**小型丸底壺**（3・4） 3は口縁部がラッパ状に開き端部は鋭利で、わずかな胴部は沈線状の段で仕切れ、底部は丸底をなす。内外両面共に丁寧なミガキで仕上げる。4は直立気味の口縁部に編球形の胴部が続き、頸部は、くの字状で内面が鋭利な稜線を巡らせている。

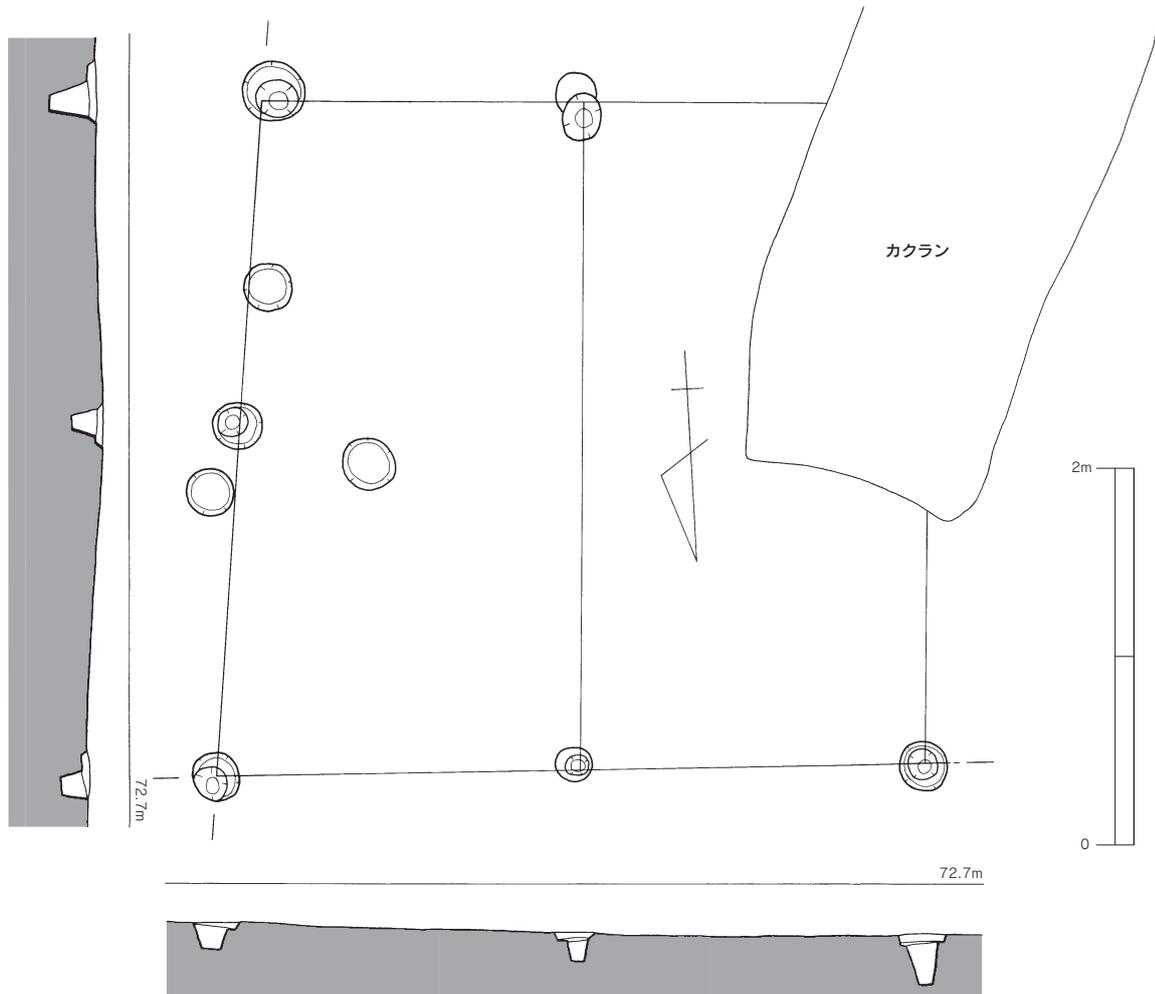
**鉢**（5・6） 5は丸底の椀形を呈し、外面下部にヘラミガキの調整が残る。6は脚台付の鉢と考えられる。

**壺**（7～9） 7・8は直口壺でラッパ状に開くやや長めの口縁部と尖底気味の球形胴部を特徴とする。外面は全体を斜位の細かなハケメで調整し、内面は口縁部から肩部にかけて横方向の細かなハケメと胴部がヘラケズリによって仕上げられている。8は7同様の形状と考えられ、内面のヘラケ

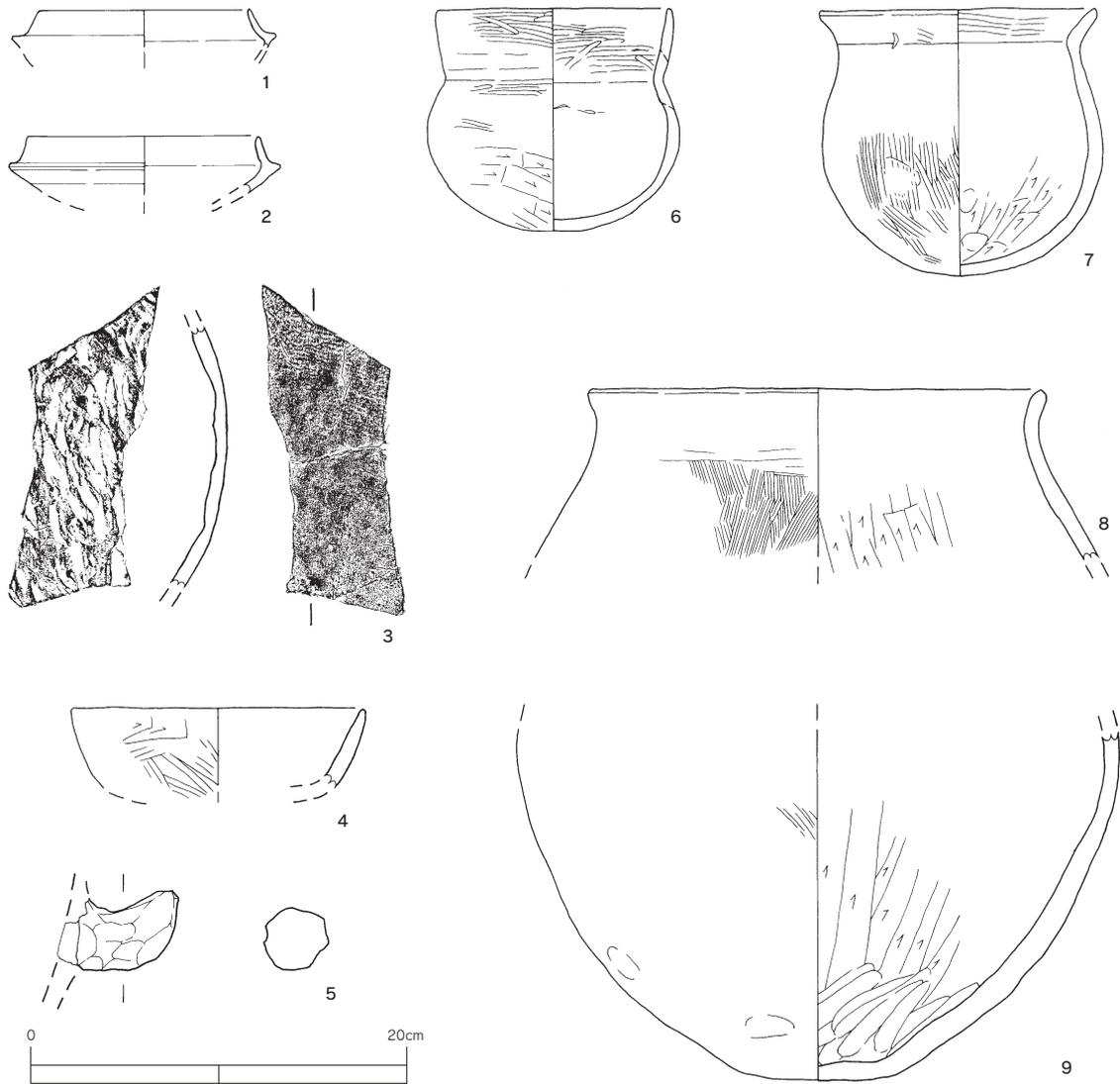


- 土層
- 1. 1.10YR4/1 褐灰色土。
  - 2. 1.0YR4/1 褐灰色土。炭を多く含む。
  - 3. 1.0YR4/1 褐灰色土。ややしまりなし。
  - 4. 1.0YR4/1 褐灰色土。
  - 5. 1.0YR3/1 黒褐色土。粘性あり。

第16図 3号竪穴住居跡実測図 (S=1/40)



第17図 掘立柱建物跡実測図 (S=1/40)



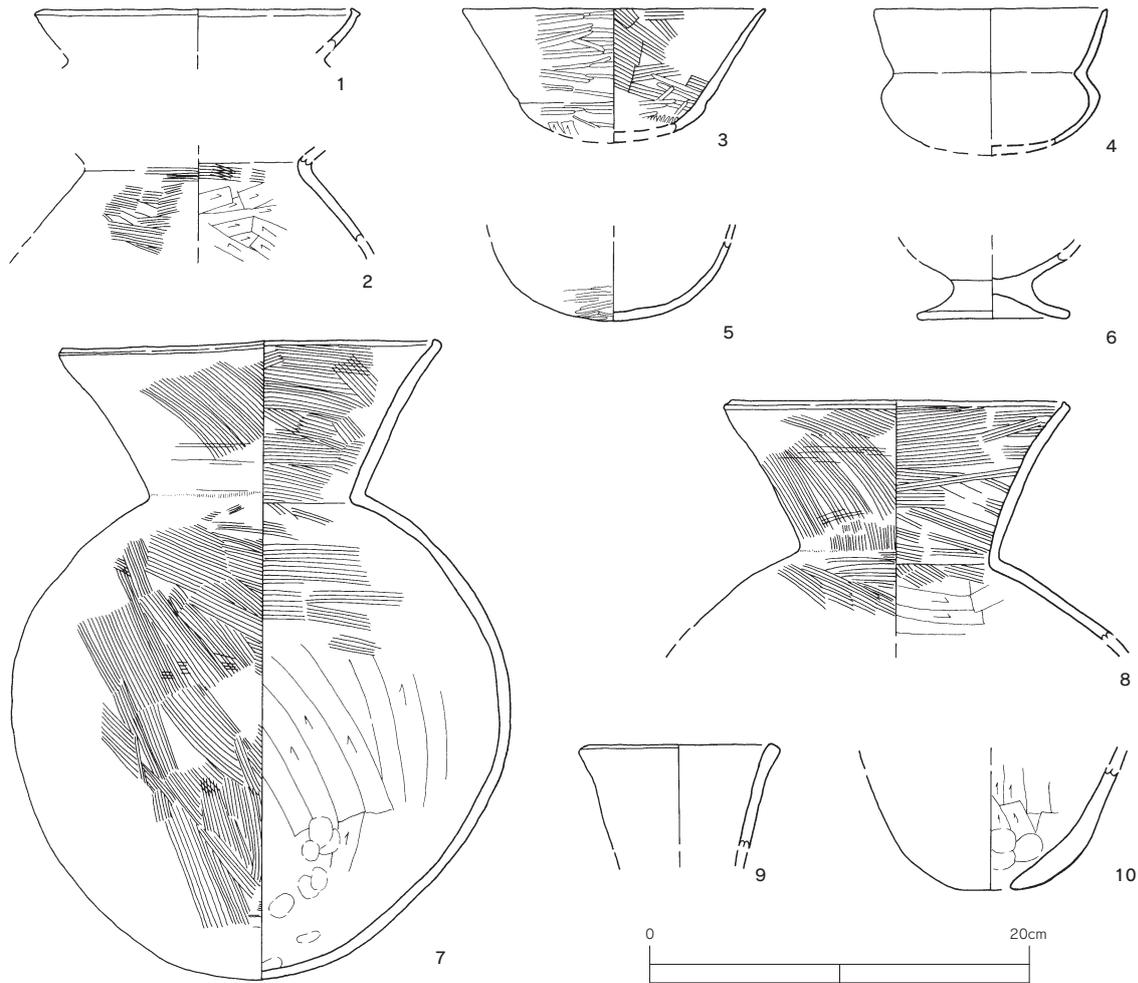
第18図 3号竪穴住居跡出土土器実測図 (S=¼)

ズリは頸部よりやや下方から施されている。9は長頸壺の口縁部で逆ハの字を呈す。

甑 (10) 底部1孔のもので外面はナデで内面はハラケズリで仕上げる。

③試掘出土須恵器・土師器・石製品 (図版8 第20図)

須恵器杯 (1～7) 1は蓋の口縁部内面に断面形が三角状のかえりを有す点から、疑宝珠形をつまみがあったと推定される。2は身の部分で口縁部は緩やかに外反し、底部に高さ5mmの高台が付される。共に奈良時代のもと考えられる。3はやや深みのある身で、受部が若干窪み口縁部は短めで内傾し、底部付近は回転ハラケズリを施す。4は浅めの身で、受部は内湾する程度になっていて口縁部は内傾する。底部は厚みがあり外面に回転ハラケズリが施される。5は口縁部が直立気味に立ち上がり、受部はやや窪む。底部は薄く仕上げられ外面に回転ハラケズリが施される。6は蓋で器高がやや高く全体に丸味を帯び、器壁は均等で口縁端部を丸く納める。内外両面共にナデにより仕上げ、頂部付近は回転ハラケズリを施す。7は蓋で器高はやや低く、口縁部は直線的で口縁端部がやや外反



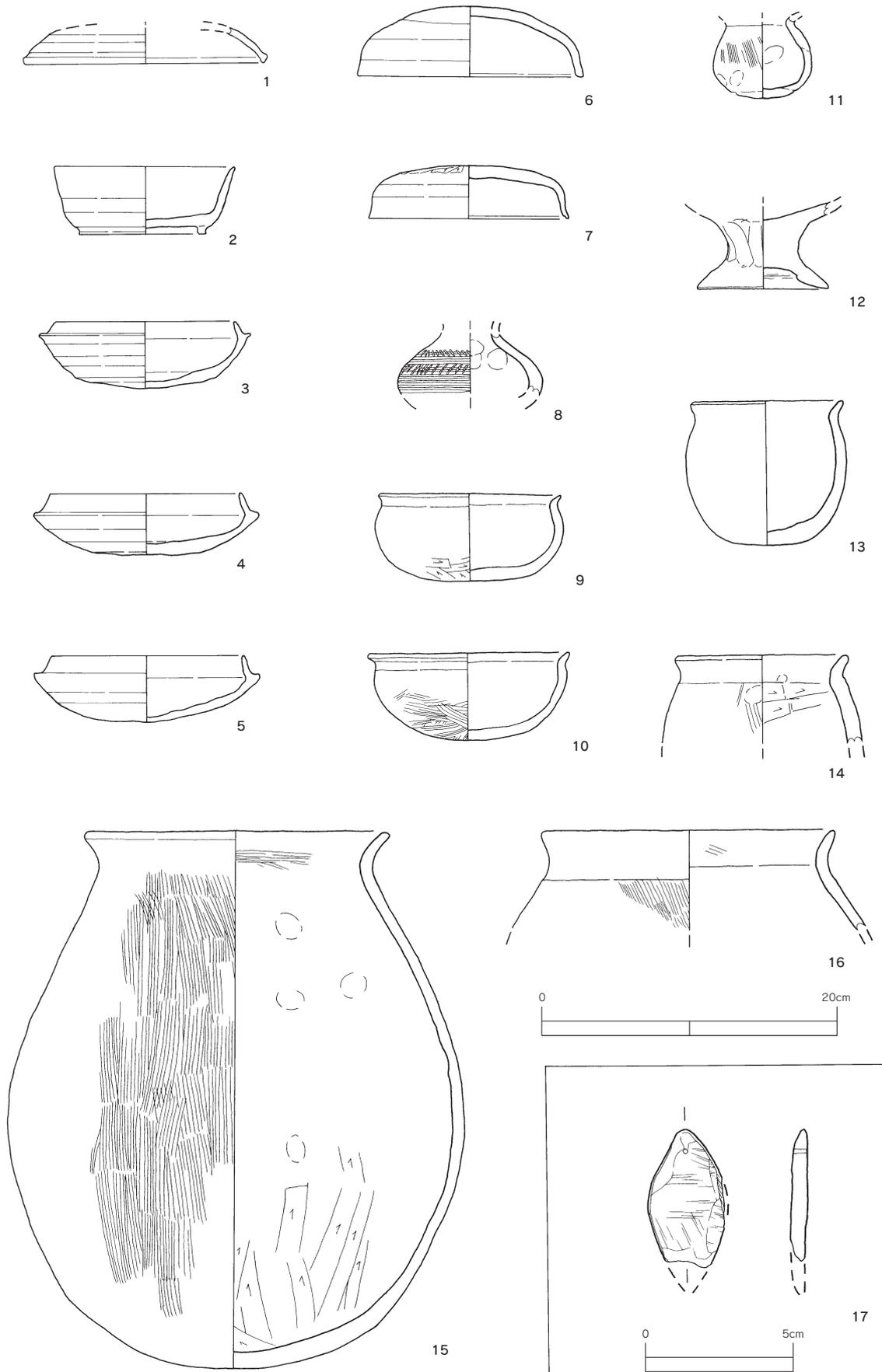
第19図 試掘・包含層出土古式土師器実測図 (S=¼)

し、内面にわずかに段が見受けられる。全体にナデによる仕上げが見られるが、頂部は静止ヘラケズリと思われる。

**須恵器甕 (8)** 器壁が厚く胴部が扁球状に張るタイプで、頸部ラインは緩やかである。胴部文様はカキメとヘラ状工具による連続刺突文からなる。

**土師器椀 (9・10)** 共に口縁部が外側に短く屈曲するタイプで胴部は半球形を呈し、底部は丸底に近い。内外両面共にナデによる調整を基本とするが、9は底部外面付近にヘラケズリが残り、10はハケメが見られる。

**土師器甕 (11~16)** 11はミニチュアの甕で下膨れの丸底に近い。外面にハケメが見られ、内外両面に指頭痕が残る。12は脚台付鉢あるいは甕の脚部で底径は小さめで脚部も短く、ヘラケズリの調整痕が明確に残る。13・14は小形の甕で口縁部が短く外反し、厚めの器壁と丸底気味の平底が特徴的である。15・16は大形甕で、15は大きく外反した口縁部と下膨れの胴部に丸底気味の底部が特徴である。16は口縁部が外反するものの短めで肩部がやや張った形状を呈す。調整は15がよく観察され、外面が縦位の粗いハケメ、内面上半はナデに指頭痕が残り、下部にはヘラケズリが残る。



第20図 試掘出土須恵器・土師器・石製品実測図 (S=¼、½)

**石製模造品** (17) 先端部を欠損する滑石製の剣形石製模造品と考えられるが、鏑や刃の表現はみられず、扁平な作りである。茎部は三角形に表現され、小孔が穿たれる。小孔には垂飾によるヒモずれの痕跡が観察される。

#### 小 結

3号竪穴住居跡出土資料は、須恵器の杯が小田編年のⅢB期に属するもので、その他大小の甕類等も矛盾がないことから古墳時代後期後半と推定される。3は薄手の甕の胴部片と考えられ、須恵器の技法による良質の土師器で、「赤焼土器」、「似非土師須恵器」<sup>(6)</sup>と呼ばれ、近年、「須恵器系土師器」<sup>(7)</sup>とも呼ばれるものに相当する可能性がある。

試掘時及び包含層から出土した古式土師器群は、直口壺や甕が示す特徴から布留式の古段階と考えられ、古墳時代前期初頭の時期を示すものである。

試掘時に出土した須恵器・土師器群の中で、1、2の口縁端部にかえりを有する蓋と方形の高台を付す身は、奈良時代のものである。3～8の須恵器及び11～16の土師器については3号竪穴住居跡出土資料と同様、古墳時代後期後半のものである。また、1点のみ出土した石製模造品がさほど退化した形態を示しておらず、古墳時代中期の資料と考えてよければ、9、10の土師器碗についても、石製模造品との共伴関係を考慮することができ、一定の時期幅が想定されるものの、古墳時代中期まで遡る資料となる可能性がある。

#### 註

- (1) 齊藤瑞穂「九州弥生時代研究における福岡市城南区浄泉寺遺跡の役割」『還暦、還暦?、還暦!』— 武末純一先生還暦記念献呈文集・研究集— 2010
- (2) 武末純一「[3]西日本の瓦質土器—九州を中心に」『日韓交渉の考古学』弥生時代編1991
- (3) 福岡県教育委員会『蒲船津江頭遺跡Ⅲ』有明海沿岸バイパス関係埋蔵文化財調査報告10集2011
- (4) 嘉穂町教育委員会『アナフ遺跡Ⅱ』嘉穂町文化財調査報告書13集1992
- (5) 福岡県地学ガイド編集委員会編「2-2宮田町千石峡の関門層群」『福岡県 地学ガイド』コロナ社2004及び執筆者の観察による。
- (6) 橋口達也「似非土師須恵器」『生産と流通の考古学』横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ
- (7) 中島 圭「須恵器系土師器の研究—いわゆる赤焼土器の再検討—」『還暦、還暦?、還暦!』— 武末純一先生還暦記念献呈文集・研究集— 2010

#### 参考文献

柳田康雄「土師器の編年 2九州」『古墳時代の研究』[6土師器と須恵器]雄山閣1991

第1表1 一丁五反遺跡出土土器観察表

図NO	遺物NO	器種	色調	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	焼成	胎土	備考
3	1	深鉢	灰褐色	—	—	—	やや不良	2mm以下の砂粒	包含層
3	2	深鉢	灰褐色	—	—	—	良	2mm以下の砂粒	包含層
3	3	深鉢	灰黄褐色	—	—	—	良	1.5mm以下の砂粒	包含層
3	4	深鉢	明黄褐色	—	—	—	不良	2.5mm以下の砂粒	包含層
7	1	甕	褐灰色	34	11.8以上	—	良	5mm以下の砂粒	1号住居
7	2	甕	橙色	27.3	3以上	—	やや不良	1.5mm以下の砂粒	1号住居
7	3	甕	橙色	28	4.8以上	—	良	2mm以下の砂粒	1号住居
7	4	甕	にぶい橙色	25.7	2.2以上	—	不良	3mm以下の砂粒	1号住居
7	5	甕	橙色	24	3.2以上	—	やや不良	1mm以下の砂粒	1号住居
7	6	甕	橙色	36.4	4.4以上	—	良	2mm以下の砂粒	1号住居
7	7	甕	浅黄色	28	3以上	—	良	2mm以下の砂粒	1号住居
7	8	甕	灰黄褐色	25.8	2.8以上	—	良	2mm以下の砂粒	1号住居
7	9	甕	にぶい黄橙色	26	6.5以上	—	良	3mm以下の砂粒	1号住居
7	10	甕	にぶい黄橙色	28	5.3以上	—	良	1mm以下の砂粒	1号住居
7	11	甕	浅黄橙色	28	4.5以上	—	良	2mm以下の砂粒	1号住居
7	12	甕	にぶい黄橙色	30	2.8以上	—	不良	2mm以下の砂粒	1号住居
7	13	甕	灰黄褐色	38.8	39.5以上	—	良	3mm以下の砂粒	1号住居
7	14	甕	にぶい橙色	—	4.7以上	6.8	やや不良	3mm以下の砂粒	1号住居
7	15	甕	浅黄色	—	6.8以上	7.1	良	3mm以下の砂粒	1号住居
7	16	甕	にぶい黄色	—	9以上	7.9	良	2.5mm以下の砂粒	1号住居
8	17	壺	褐色	25	4以上	—	良	2mm以下の砂粒	1号住居
8	18	壺	灰黄褐色	16.6	4.2以上	—	良	1.5mm以下の砂粒	1号住居
8	19	壺	黒褐色	25.6	13.3以上	—	良	1.5mm以下の砂粒	1号住居
8	20	壺	黒褐色	40	3.4以上	—	良	1.5mm以下の砂粒	1号住居
8	21	壺	橙色	26	3.4以上	—	やや不良	5mm以下の砂粒	1号住居
8	22	壺	橙色	31.8	5.5以上	—	やや不良	2.5mm以下の砂粒	1号住居
8	23	壺	浅黄色	—	2.6以上	—	やや不良	2mm以下の砂粒	1号住居
8	24	無頸壺	橙色	16.3	3以上	—	不良	2.5mm以下の砂粒	1号住居
8	25	無頸壺	にぶい黄橙色	—	6以上	—	良	2mm以下の砂粒	1号住居
8	26	無頸壺	にぶい黄色	—	4.5以上	—	不良	2mm以下の砂粒	1号住居
8	27	蓋	橙色	—	5以上	25.5	良	2mm以下の砂粒	1号住居
8	28	高杯	橙色	25	9以上	—	不良	1.5mm以下の砂粒	1号住居
8	29	鉢	明赤褐色	—	3.5以上	—	やや不良	4mm以下の砂粒	1号住居
8	30	鉢	にぶい橙色	16.5	5.6以上	—	良	3mm以下の砂粒	1号住居
8	31	鉢	にぶい黄橙色	26	5.5以上	—	良	3mm以下の砂粒	1号住居
8	32	支脚	橙色	—	13.8	—	良	5mm以下の砂粒	1号住居
8	33	支脚	橙色	—	4.3以上	7	良	2mm以下の砂粒	1号住居
8	34	器台	灰黄褐色	—	4.3以上	8	良	2mm以下の砂粒	1号住居
9	1	高杯	明赤褐色	26.4	2.6以上	—	良	3mm以下の砂粒	2号住居
9	2	鉢	灰黄色	—	2.4以上	—	良	2mm以下の砂粒	2号住居
9	3	鉢	にぶい橙色	14.8	6.1以上	—	良	2mm以下の砂粒	2号住居
9	4	鉢	明赤褐色	22.7	16.7	7.5	良	7mm以下の砂粒	2号住居
9	5	甕	にぶい黄橙色	22	4.8以上	—	良	3mm以下の砂粒	2号住居
9	6	甕	にぶい黄橙色	19.4	5.9以上	—	良	2mm以下の砂粒	2号住居
9	7	甕	橙色	28	3.2以上	—	良	3mm以下の砂粒	2号住居
9	8	甕	橙色	19.6	3.8以上	—	良	2mm以下の砂粒	2号住居
9	9	甕	浅黄褐色	27.2	4.7以上	—	良	2mm以下の砂粒	2号住居
9	10	甕	赤褐色	37	5以上	—	良	3mm以下の砂粒	2号住居
9	11	甕	橙色	34.4	5以上	—	良	4mm以下の砂粒	2号住居
9	12	甕	浅黄褐色	38	6以上	—	良	3mm以下の砂粒	2号住居
9	13	甕	橙色	47	4.2以上	—	不良	3mm以下の砂粒	2号住居
9	14	壺	橙色	—	5.5以上	—	良	3mm以下の砂粒	2号住居
9	15	壺	にぶい橙色	—	3.2以上	—	良	3mm以下の砂粒	2号住居
9	16	壺	浅黄褐色	8	3.8以上	—	良	3mm以下の砂粒	2号住居
10	1	甕	橙色	15	3以上	—	良	2mm以下の砂粒	4号住居
10	2	甕	にぶい黄褐色	23	4.5以上	—	不良	3mm以下の砂粒	4号住居
10	3	甕	橙色	34.8	2.8以上	—	良	2mm以下の砂粒	4号住居
10	4	甕	にぶい黄褐色	24	22.4以上	—	良	3mm以下の砂粒	4号住居
10	5	甕	にぶい黄褐色	28	2.8以上	—	良	2mm以下の砂粒	4号住居

第1表2 一丁五反遺跡出土土器観察表

図NO	遺物NO	器種	色調	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	焼成	胎土	備考
10	6	甕	浅黄橙色	28.4	2.5以上	—	良	2mm以下の砂粒	4号住居
10	7	甕	橙色	30.2	2.5以上	—	不良	1mm以下の砂粒	4号住居
10	8	鉢	灰白色	20	6.2以上	—	良	1mm以下の砂粒	4号住居
10	9	鉢	褐灰色	25	3以上	—	良	2mm以下の砂粒	4号住居
10	10	壺	にぶい褐色	25.4	10.3以上	—	良	3mm以下の砂粒	4号住居
10	11	壺	にぶい黄橙色	—	23.2以上	10.2	良	4mm以下の砂粒	4号住居
11	1	甕	橙色	28.9	31.3以上	—	良	2mm以下の砂粒	ピット
11	2	壺	赤褐色	18.7	17	8.5	良	3mm以下の砂粒	土坑
11	3	甕	橙色	—	17以上	7.8	良	2mm以下の砂粒	土坑
11	4	鉢	にぶい黄褐色	26.8	15.6	10	良	3mm以下の砂粒	土坑
12	1	壺	浅黄色	—	2.1以上	—	不良	2mm以下の砂粒	試掘
12	2	壺	にぶい黄橙色	—	3.5以上	—	不良	3mm以下の砂粒	試掘
12	3	壺	にぶい黄橙色	30.6	2.5以上	—	良	1mm以下の砂粒	試掘
12	4	壺	赤褐色	13.2	3.5以上	—	良	2mm以下の砂粒	試掘
12	5	壺	赤褐色	—	4.5以上	—	良	1mm以下の砂粒	試掘
12	6	甕	にぶい黄橙色	23.2	3以上	—	良	4mm以下の砂粒	試掘
12	7	甕	にぶい橙色	33	2以上	—	不良	3mm以下の砂粒	試掘
12	8	甕	にぶい橙色	31.2	3.7以上	—	良	2mm以下の砂粒	試掘
12	9	甕	にぶい黄橙色	34.2	7.2以上	—	不良	2mm以下の砂粒	試掘
12	10	甕	にぶい黄橙色	40.6	7.5以上	—	良	3mm以下の砂粒	試掘
12	11	甕	にぶい黄橙色	50	10以上	—	良	3mm以下の砂粒	試掘
12	12	甕	橙色	52	6.5以上	—	良	3mm以下の砂粒	試掘
12	13	鉢	にぶい黄橙色	12.6	7.8以上	—	良	3mm以下の砂粒	試掘
12	14	支脚	橙色	8.6	6.4	7.8	不良	2mm以下の砂粒	試掘
18	1	杯身(須)	灰白色	11.4	2以上	—	不良	0.5mm以下の砂粒	3号住居
18	2	杯身(須)	灰色	12.6	3.2以上	—	良	2mm以下の砂粒	3号住居
18	3	甕	浅黄橙色	—	14以上	—	不良	5mm以下の砂粒	3号住居
18	4	杯	橙色	15.6	4.3以上	—	不良	2.5mm以下の砂粒	3号住居
18	5	甕(把手)	明赤褐色	—	—	—	良	4mm以下の砂粒	3号住居
18	6	甕	赤褐色	12.7	11.8	2.8	良	3mm以下の砂粒	3号住居
18	7	甕	明赤褐色	14.7	14.2	—	不良	4mm以下の砂粒	3号住居
18	8	甕	浅黄色	30	9以上	—	不良	3mm以下の砂粒	3号住居
18	9	甕	明赤褐色	—	18.6以上	5.5	良	4mm以下の砂粒	3号住居
19	1	甕	にぶい黄橙色	16.2	2.2以上	—	良	2mm以下の砂粒	包含層
19	2	甕	橙色	—	4.3以上	—	良	3mm以下の砂粒	不明
19	3	小型丸底壺	灰黄褐色	16	6.5以上	—	良	3mm以下の砂粒	試掘
19	4	小型丸底壺	橙色	12.4	7.2以上	—	良	3mm以下の砂粒	包含層
19	5	鉢	明黄褐色	—	4以上	—	良	1mm以下の砂粒	試掘
19	6	脚台付鉢	にぶい黄橙色	—	3以上	8	良	2mm以下の砂粒	試掘
19	7	広口壺	橙色	20.4	33.8	—	良	3mm以下の砂粒	包含層
19	8	広口壺	橙色	17.4	12.6以上	—	良	2mm以下の砂粒	包含層
19	9	長頸壺	にぶい黄橙色	10.6	5.5以上	—	良	2mm以下の砂粒	包含層
19	10	甕	橙色	—	6.5以上	2	不良	3mm以下の砂粒	試掘
20	1	杯蓋(須)	灰色	—	2.4以上	16.2	良	2mm以下の砂粒	試掘等
20	2	杯身(須)	灰色	12.3	4.7	—	良	0.5mm以下の砂粒	試掘等
20	3	杯身(須)	オリーブ灰色	12	4.5	—	良	3mm以下の砂粒	試掘等
20	4	杯身(須)	灰色	13	4.2	—	良	6mm以下の砂粒	試掘等
20	5	杯身(須)	灰色	13.1	4.6	—	不良	1mm以下の砂粒	試掘等
20	6	杯蓋(須)	灰白色	15.2	4.8	—	やや不良	2mm以下の砂粒	試掘等
20	7	杯蓋(須)	緑灰色	14.5	3.7	—	良	1mm以下の砂粒	試掘等
20	8	甕(須)	灰色	—	4.2以上	—	良	2mm以下の砂粒	試掘等
20	9	椀	橙色	12.3	5.9	—	やや不良	5mm以下の砂粒	試掘等
20	10	椀	橙色	13.7	6	—	やや不良	3mm以下の砂粒	試掘等
20	11	甕(ミニチュア)	橙色	—	5.5以上	—	やや不良	1mm以下の砂粒	試掘等
20	12	脚台付甕	橙色	—	5.5以上	—	良	3mm以下の砂粒	試掘等
20	13	甕	明赤褐色	10.3	9.8	—	不良	6mm以下の砂粒	試掘等
20	14	甕	明赤褐色	11.5	6以上	—	不良	3.5mm以下の砂粒	試掘等
20	15	甕	橙色	20.4	36.5	—	良	5mm以下の砂粒	試掘等
20	16	甕	橙色	19.7	6.5以上	—	やや軟質	4mm以下の砂粒	試掘等

第2表 一丁五反遺跡出土石器・土製品観察表

図NO	遺物NO	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
13	1	扁平片刃石斧	蛇紋岩	9.7	4.25	1.7	加工時の剥離痕を残す。
13	2	扁平片刃石斧	蛇紋岩	6.8	4.5	1.2	刃部全面が欠損する。
13	3	蛤刃石斧	緑色砂岩	9.6以上	5.5	4.2	胴部より欠損する。
13	4	打製石斧	片岩系	5.5以上	4.3	0.7	基部付近の資料
13	5	石庖丁	輝緑凝灰岩	7.1以上	4.7	0.6	孔部から欠損
13	6	石庖丁	輝緑凝灰岩	7.8以上	4.7	0.8	孔部から欠損
13	7	石庖丁	輝緑凝灰岩	10以上	5.6	0.7	孔部から欠損
13	8	石庖丁(未製品)	青灰色頁岩	12.6	6	1	1次薄片の両面加工
14	9	土製投弾	—	4.3	2.5	2.4	
14	10	磨製石剣	砂質頁岩	8以上	3.9	1.1	身中程の破片
14	11	磨製石鎌	蛇紋岩	2.6以上	1.8	0.2	身中程の破片
14	12	磨製石剣状石器	蛇紋岩	5.8	2.5	0.3	胴部外湾のヘラ状
14	13	磨製石剣状石器	蛇紋岩	6.8	2.4	0.35	石剣状だが扁平
14	14	磨製石剣状石器	蛇紋岩	2.8以上	2	0.2	石剣状だが扁平
14	15	磨製石剣状石器	蛇紋岩	4.3以上	1.6	0.2	石剣状だが扁平
14	16	磨製石剣状石器	蛇紋岩	5.2以上	2.6	0.6	石剣状だが扁平
14	17	磨製石剣状石器	蛇紋岩	5.6以上	2.6	0.6	胴部外湾のヘラ状
14	18	磨製石剣状石器	蛇紋岩	5.7以上	3	0.7	石剣状だが扁平
14	19	磨石	—	6.9	—	2.1	
14	20	砥石	細粒砂岩	4.8以上	1.7	0.7以上	中砥
14	21	砥石	砂岩	8.5以上	4.2	2.7	中砥
14	22	砥石	砂岩	5.8以上	3.6	3.2	中砥
14	23	砥石	泥(シルト)岩	8.5以上	4.1	2.8以上	仕上砥
15	24	敲石	安山岩系	17.5以上	7.1	4.2	
15	25	砥石	細粒砂岩	19.7以上	9	4.1	粗砥
15	26	砥石	花崗岩系	48.8	25	13.6	粗砥
15	27	砥石	砂岩	30	26	10	粗砥
15	28	砥石	砂岩	33.5	23.2	7.4	粗砥
15	29	砥石	砂岩	30.6	25.7	6.2	粗砥
20	17	石製模造品	滑石	4.5以上	2.8	0.5	

## 5 総 括

今回の調査では、小規模な発掘面積であったにもかかわらず縄文から奈良時代に至る遺構、遺物が検出された。ここでは調査の成果、課題等をまとめることとする。

### ① 縄文時代

調査区の最下層である砂質層から、前期の轟B式に相当する土器片が得られた。土層の特徴から河川の影響下にあった時期のものと考えられるが、表面には焦げ付きが残り、ローリングの跡は見られなかった。同時期の土器片は周辺各地に散布し、嘉穂盆地北部の遠賀川河床の深部からも摩滅のない資料が得られており、盆地内の各地に人々の活動が及んでいたことが分かる。また、この状況は曾畑式の段階まで連続性があることも判明しており、遠賀川下流域では、縄文海進による古遠賀湾の形成とその周辺部に多くの貝塚が形成し始めた時期にもあたる。

### ② 弥生時代

遺構では3棟の竪穴住居跡が検出された。いずれも中期後半における方形プランの竪穴住居跡で、本地区の特徴を示しており、同じ嘉穂盆地内の穂波川流域から立岩地区にかけて円形プランの住居跡が残存することとは対照的な様相を示す。また、土坑から出土した大型の砥石等は、その出土状況から廃棄物ではなく、埋納されていた可能性も考えられる。

遺物では須玖Ⅱ式の土器に伴う磨製石器類が注目されよう。一つは蛇紋岩という縄文時代の磨製石器に使用される在地の原材を利用した扁平片刃石斧で、刃先の欠損からして明らかに使用されており自村消費例と考えられる。また、同様の石材で製作された石剣状磨製石器の機能は不明であるが、いずれも嘉穂才田地区のアナフ遺跡においても確認されており、現状では千手盆地内での自村消費の石器製作として、極めて地域性の高い現象と理解される。本遺跡ではさらに、磨製石器製作に欠くことのできない砥石が、粗砥から仕上砥まで大・中・小と出土し、最も大きな粗砥の表面には、扁平片刃石斧の寸法大に磨り減った凹みが見受けられた。アナフ遺跡では製品や未製品の出土は多かったものの、砥石の出土がなかったため、今回の事例を加えることで小地域における石器生産の一面をうかがえるようになったことは大きな成果だといえる。

### ③ 古墳時代以降

遺構では弥生時代遺構面の上層遺構として時期不明の掘立柱建物跡1棟と古墳時代後期後半の竪穴住居跡2棟が検出された。掘立柱建物跡については、上層から奈良時代の遺物が出土しており、当時期の可能性もある。試掘出土の須恵器、土師器の中には、今回、報告できなかった5号竪穴住居跡の遺物が、少なからず含まれていたと考えられる。遺物では、1点ながら剣形石製模造品の出土が特筆される。嘉穂盆地では、市内の貞月遺跡（旧森分遺跡）などから滑石製模造品の出土がわずかに見られるのみで貴重な一例を加えることになった。今回は遺構からの出土ではないものの、集落祭祀の様相をうかがえる可能性がある遺跡としても今後の調査に期待がもたれる。

なお、執筆にあたり小田富士雄先生、片岡宏二氏には貴重なご意見をいただきました。末尾ながら記して感謝申し上げます。

## Ⅱ 白井遺跡群 棧敷原遺跡

### 1 調査に至る経緯と調査経過

平成12年6月、碓井町（現嘉麻市）の下白井日吉神社で鉦害復旧工事が行われる旨の情報を得た。当地が周知の埋蔵文化財包蔵地にあたるため鉦害復旧事業団に連絡をとり、工事着手前に福岡県教育委員会への届出が必要となる旨を伝えた。7月12日、遺跡の確認調査を実施したところ、表土下15cmで遺構を検出した。後日、事業団及び下白井東区と遺跡の保護について協議した結果、遺跡については、工事計画を見直し盛土保存することで合意を得ることができた。また、確認調査で検出した遺構については、碓井町で遺跡等詳細分布調査を実施していたこともあり、詳細が不明であった本遺跡の情報収集のため発掘調査することで了承を得ることもできた。

発掘調査は、平成12年8月1日から8月15日の期間で実施した。調査対象とした遺構は貯蔵穴1基のみであったが、予想以上に出土遺物が多く掘削作業に手間取ることとなった。また、調査区が社殿の軒下に位置するため、遺構が雨水により冠水し、排水作業に労力を費やすこともしばしばあった。当初の予定より調査が大幅に遅れることとなったが、8月8日に出土状況の写真撮影を終え、9日には凶化作業へと移り、調査を終了した。発掘調査にあたり、ご理解ご協力いただいた下白井東区の皆様をはじめ、関係各位に厚く感謝申し上げます。

なお、発掘調査及び整理作業は下記の組織体制で直営にて実施した。

#### 平成12年度（調査）

調査主体	碓井町教育委員会			
総括	碓井町教育委員会	教育長	坂口 正月	
	社会教育課	課長	伊藤 哲三	
	碓井琴平文化館	館長	犬丸 英二	
庶務・調査		係長	福田 修	
		係	松浦 宇哲（調査担当）	
発掘調査参加者		溝口 博行、大塚 直祐		

#### 平成23年度（整理）

総括	嘉麻市教育委員会	教育長	栗野 良一	
	教育部	次長	秋吉 俊輔	
	生涯学習課	課長	山口 朝光	
		課長補佐	赤地 淳一	
庶務・整理	文化財係	係長	福島 日出海	
		係	松浦 宇哲（整理担当）	
整理作業参加者		常盤 拓生、紫原 香世		

## 2 遺跡の概要と歴史的環境（第1・21図）

棧敷原遺跡は嘉麻市下白井の遠賀川とその支流である千手川に挟まれた、標高約37mの低台地に形成されている。北側の下白井地区から南の上白井地区へ南北1.1km程に細長く伸びるこの台地上には弥生時代から中近世に至る遺跡が連綿と形成され、嘉穂盆地南部では比較的大規模な遺跡群（白井遺跡群）を形成する。

本遺跡は、後述のように弥生時代前期の集落跡を主体とする遺跡であることが今回の調査で明らかとなった。同時期の遺跡では、本遺跡より千手川を南へ1200m程遡った位置に石竹遺跡（第1図の13）がある。標高約50mの丘陵上に立地し、昭和28年の校地造成工事中に土器等が多数出土している。十分な調査は行われていないが、幅2.8m、深さ1.5mの断面V字形の環溝が発見され、環溝の内側には複数の貯蔵穴も確認されている。弥生時代中期の遺跡では、本遺跡から西側へ1000mの地点に八王寺遺跡がある。25000㎡を超える面積が調査され、弥生時代前期末から中期末まで続く大規模集落の様相が明らかとなっている。弥生時代後期の遺跡では、本遺跡より南西800mの地点に方格規矩四神鏡を出土した五穀神遺跡（第1図の3）、南へ1700m千手川を遡った地点に内行花文鏡を出土した笹原遺跡（第1図の15）がある。いずれも、工事中の発見であるが、後漢鏡1面を副葬する石棺墓が報告されている。

古墳時代の遺跡では、今回の調査地点に北接する位置に直径約34mの円墳となる下白井日吉古墳（第1図の1）がある。詳細な調査は行なわれていないため築造時期等は不明であるものの、平坦な墳丘頂上部をもつ大型の円墳であることなどから、古墳時代中期を降らない首長墓の可能性が高いと考えられる。また、古代律令期においては、当地周辺が嘉麻郡碓井郷の中心地であったことが、史料から窺い知ることができる。碓井郷は大宰府観世音寺の封戸に編入され、後に荘園化されている。当地に日吉神社が鎮座するのは、観世音寺領となった歴史と無関係ではない。

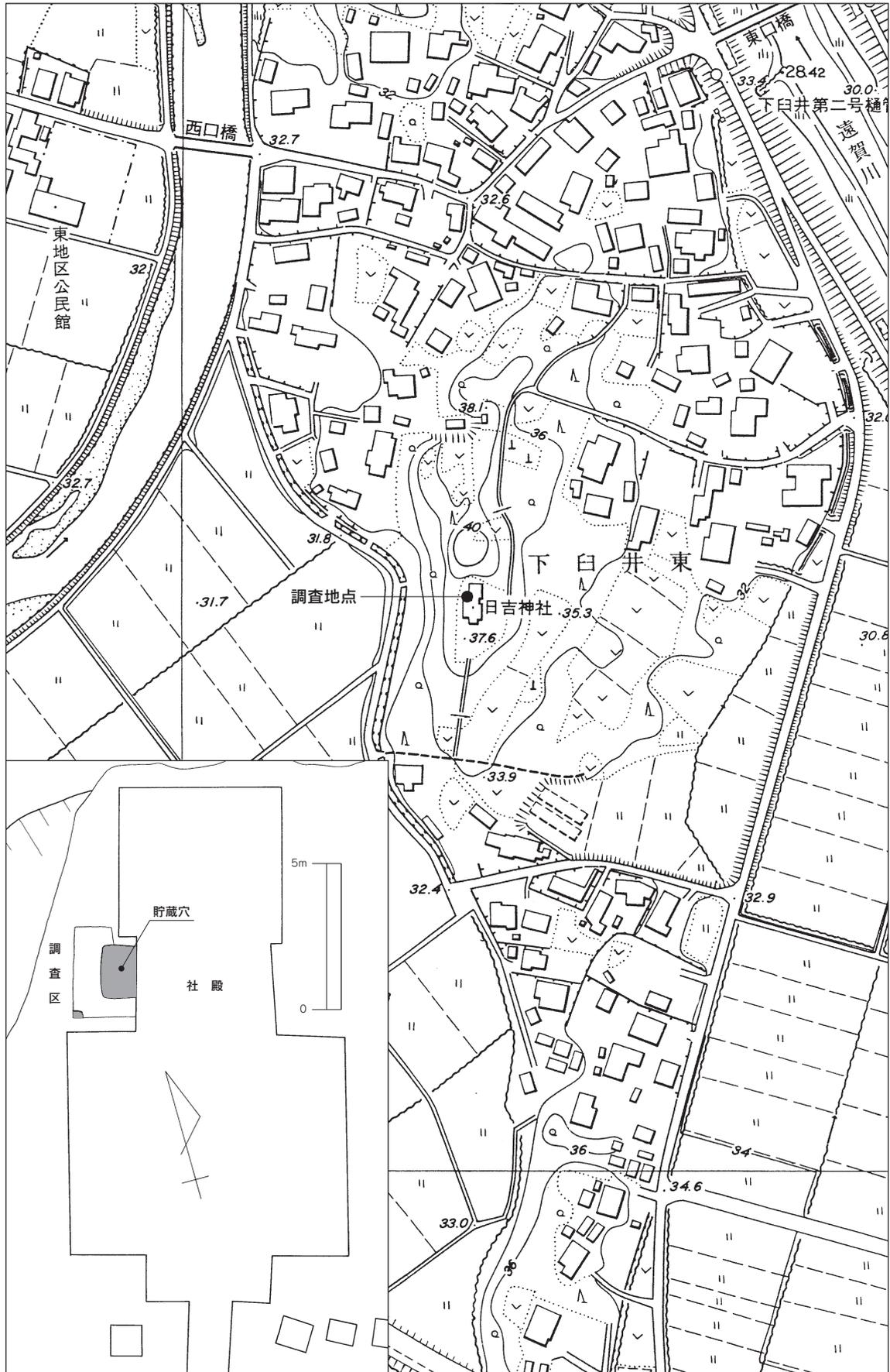
このように、棧敷原遺跡が位置する地域は、本遺跡が形成された弥生時代以来、原始・古代における地域社会の中心地の一つであり続けたことが、遺跡や史料から窺い知ることが出来る。棧敷原遺跡は、こうした歴史の端緒を示す遺跡としても重要だといえよう。

## 3 調査の内容

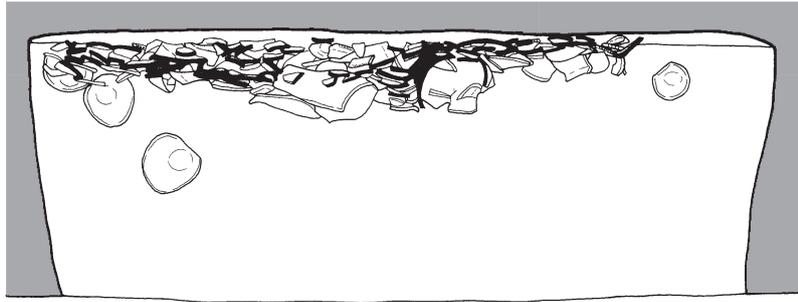
### （1）貯蔵穴（図版10 第22図）

平面形は1辺180cm程の隅丸方形で、断面形は袋状を呈す。明褐色土の地山面を掘込んで作られており、深さ70cm程が残存する。覆土は1層に近世以降の遺物を含む。2層以下は弥生時代前期のみの遺物を含み、層位の状況から大きく上層、中層、下層に分けることができる。下層（20～26層）は山なりの層位で、密に重なる弥生土器片、石器片を包含し、廃棄時の状況を示す。中層（7～19層）は下層上に自然堆積した層などを含み、下層に比べると遺物量は少ない。中・下層では、土中に炭化物を多く含み、種子類や炭化米の植物遺存体も少量ながら出土している。上層は、地山のブロックを含み、貯蔵穴の上部が崩落し堆積した層であろう。遺物は小片が多い。

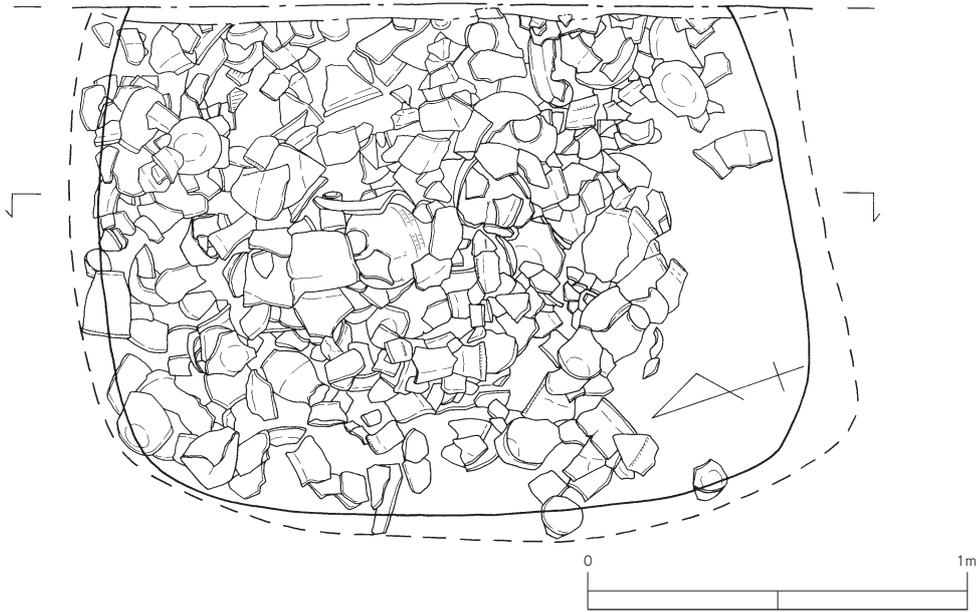
なお、貯蔵穴の1/5程は社殿にかかっていたため、一部を未調査のまま埋め戻している。



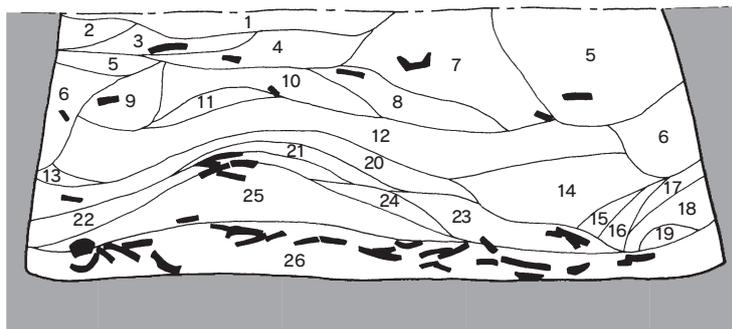
第21図 周辺地形及び調査区位置図 (S=1/25000、1/200)



37.7m



37.7m



土層

- 1. 10YR3/3暗褐色土。しまりなし。
- 2. 7.5YR4/4褐色土。粘性がある。
- 3. 10YR3/3暗褐色土。ややしまりなし。
- 4. 10YR3/3暗褐色土。
- 5. 7.5YR4/4褐色土。粘性がある。
- 6. 7.5YR4/2灰褐色土。ややしまっている。
- 7. 10YR3/3暗褐色土。
- 8. 10YR4/2~5/2灰黄褐色土。

- 9. 10YR3/4暗褐色土。しまりなし。
- 10. 10YR3/3暗褐色土。
- 11. 10YR4/3にぶい黄褐色土。
- 12. 10YR4/1褐色土。
- 13. 7.5YR4/3褐色土。しまりなし。
- 14. 7.5YR4/3褐色土。ややしまっている。
- 15. 7.5YR4/2灰褐色土。ややしまっている。
- 16. 7.5YR4/3褐色土。粘性がある。
- 17. 7.5YR4/2灰褐色土。しまりなし。

- 18. 7.5YR4/2灰褐色土。粘性がある。
- 19. 7.5YR5/6明褐色土。
- 20. 7.5YR4/3褐色土。しまりなし。
- 21. 7.5YR4/3褐色土。粘性がある。
- 22. 7.5YR4/3褐色土。
- 23. 7.5YR4/2灰褐色土。しまっている。
- 24. 7.5YR4/2灰褐色土。しまりなし。
- 25. 7.5YR3/1黒褐色土。粘性がある。
- 26. 7.5YR3/2黒褐色土。しまりなし。

第22図 貯蔵穴実測図 (S=1/20)

(2) 貯蔵穴出土土器 (図版11~15 第23~28図)

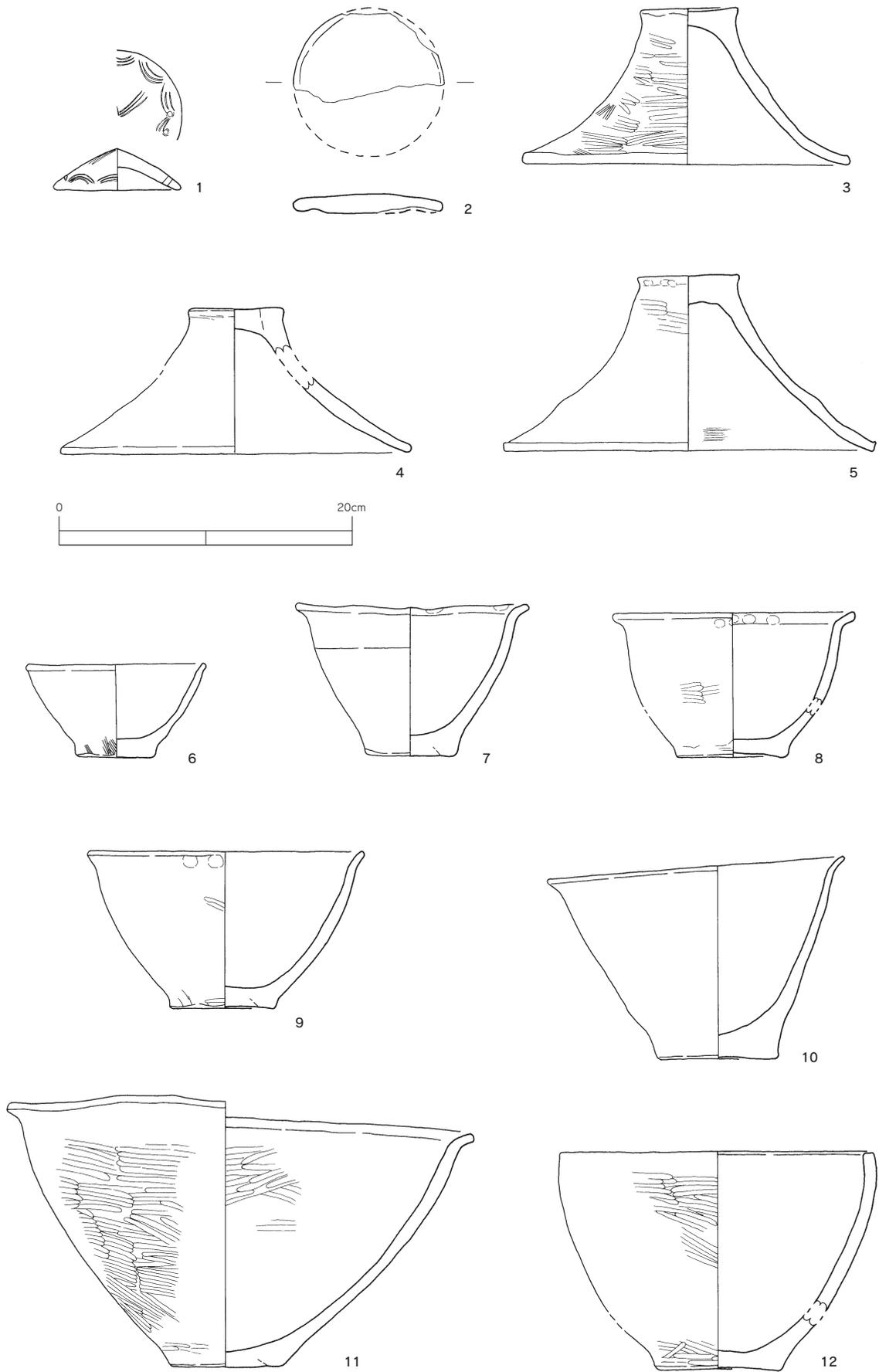
貯蔵穴からは、コンテナで25箱分の遺物が出土した。遺物の大半は弥生土器である。器種は、蓋・鉢・甕・壺形土器がみられるが、明確に高杯として判断できる資料は出土していない。図化した資料は小片も含めて235点、このうち報告できた資料は残存状況の良いものを中心に下記の60点であるが、土器の外観上の特徴等については概ね網羅することができた。

**蓋** (1~5) 1は二個対の紐孔がある小形品で、頂部側にヘラ描きによる三条の沈線、裾側に重弧文が描かれる。内外面はミガキによる調整か。2は扁平な円盤状をなすもので、端部は丸く仕上げられている。3~5はつまみをもつ甕蓋で、いずれも外面はミガキが施されている。つまみと裾端部の形状に若干の違いがみられ、つまみ頂部をわずかに窪ませ裾端部を丸く仕上げるもの(3、4)とやや厚手で平坦なつまみをもち裾端部は面取りされるもの(5)とがある。また、4、5は二次焼成を受けている。

**鉢** (6~12) 6は中央がわずかに窪む厚手の底部をもつもので、胴部下半はゆるやかに上半は直線的に外上方へ開く。口縁はほとんど外反せず直口気味で、端部は丸く仕上げられている。外面には縦方向のハケメが残る。7は厚手の平底をもつもので、胴部は直線的に開き上位でゆるやかに屈曲する。口縁は外反し端部は丸く仕上げられている。二次焼成を受けていて、器面の残存状況は悪い。8は上げ底の底部をもつもので、胴部は内湾気味に開く。口縁は外反し端部は丸く仕上げられている。外面に横方向のミガキがわずかに残る。9は平底の底部をもつもので、胴部は内湾気味に開く。口縁はわずかに外反し端部は丸く仕上げられている。外面にはミガキが施されている。10は中央がわずかに窪む底部をもつもので、胴部は直線的に開く。口縁はわずかに外反し端部は丸く仕上げられている。二次焼成を受けているため、器面の残存状況は悪く、底部付近にミガキがわずかに残る。11は平底の底部をもつもので、胴部は内湾気味に開く。口縁は外反し端部は丸く仕上げられている。内外面にはミガキが密に施され、口縁はさらにヨコナデによって仕上げられている。12は中央がわずかに窪む底部をもつもので、胴部から口縁にかけて内湾する。口縁は直口し、端部は面取りされる。外面にはミガキが施されている。

**甕** (13~35) 13と14は口縁下に沈線があるものである。13は口縁が屈曲気味に外反し、下端には刻目が施されている。刻目の横幅は2mm弱と小さく浅い刻みである。14は口縁がゆるやかに外反し、ほぼ端部全面に横幅3mm程の刻目がしっかりと刻まれている。外面にはハケメがわずかに残り、煤の付着がみられる。

15~22は口縁下が肥厚し段をなすもので、いずれも口縁は外反している。15と16は口縁や段に刻目が施されていないものである。15の器面の残存状況は悪く、調整は不明である。16は外面及び口縁内面にミガキがみられる。17は平底の底部で、胴部はあまり張ることなく上半部は上方へ内湾気味に開く。口縁端部の下端には横幅2mm弱の小さく浅い刻目が施されている。器面は二次焼成を受けていて、残存状況があまり良くないものの、口縁下には指頭圧痕、ヨコナデ、段下の胴部には縦方向のハケメがみられる。18は口縁と段に刻みをもつ。口縁の刻目は横幅3mm程で下端よりに施されている。段の刻目は横幅2mm弱と口縁よりも細いが、刻目はともにしっかりと刻まれている。外面には煤の付

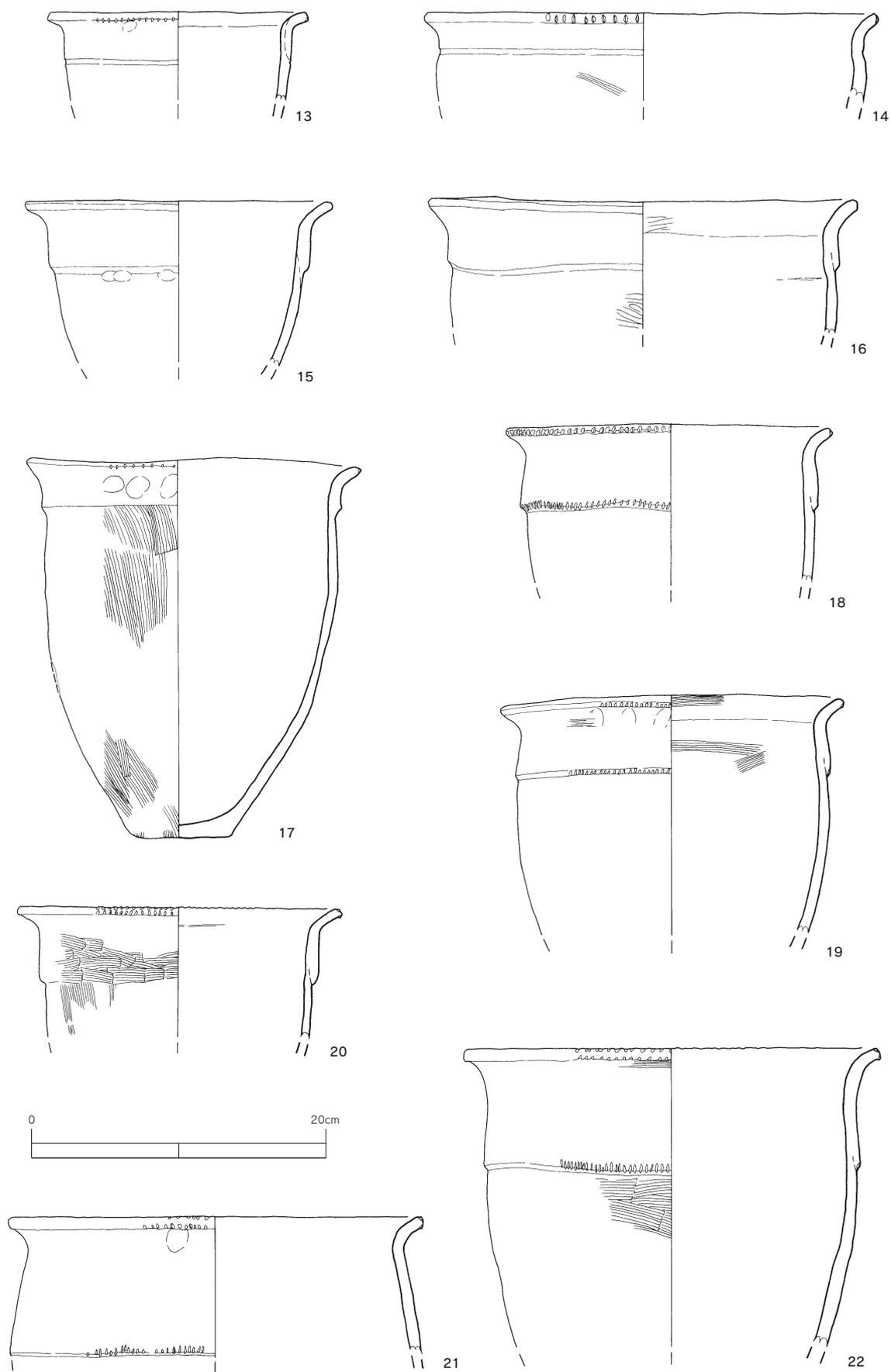


第23图 貯藏穴出土土器実測図1 (S=1/4)

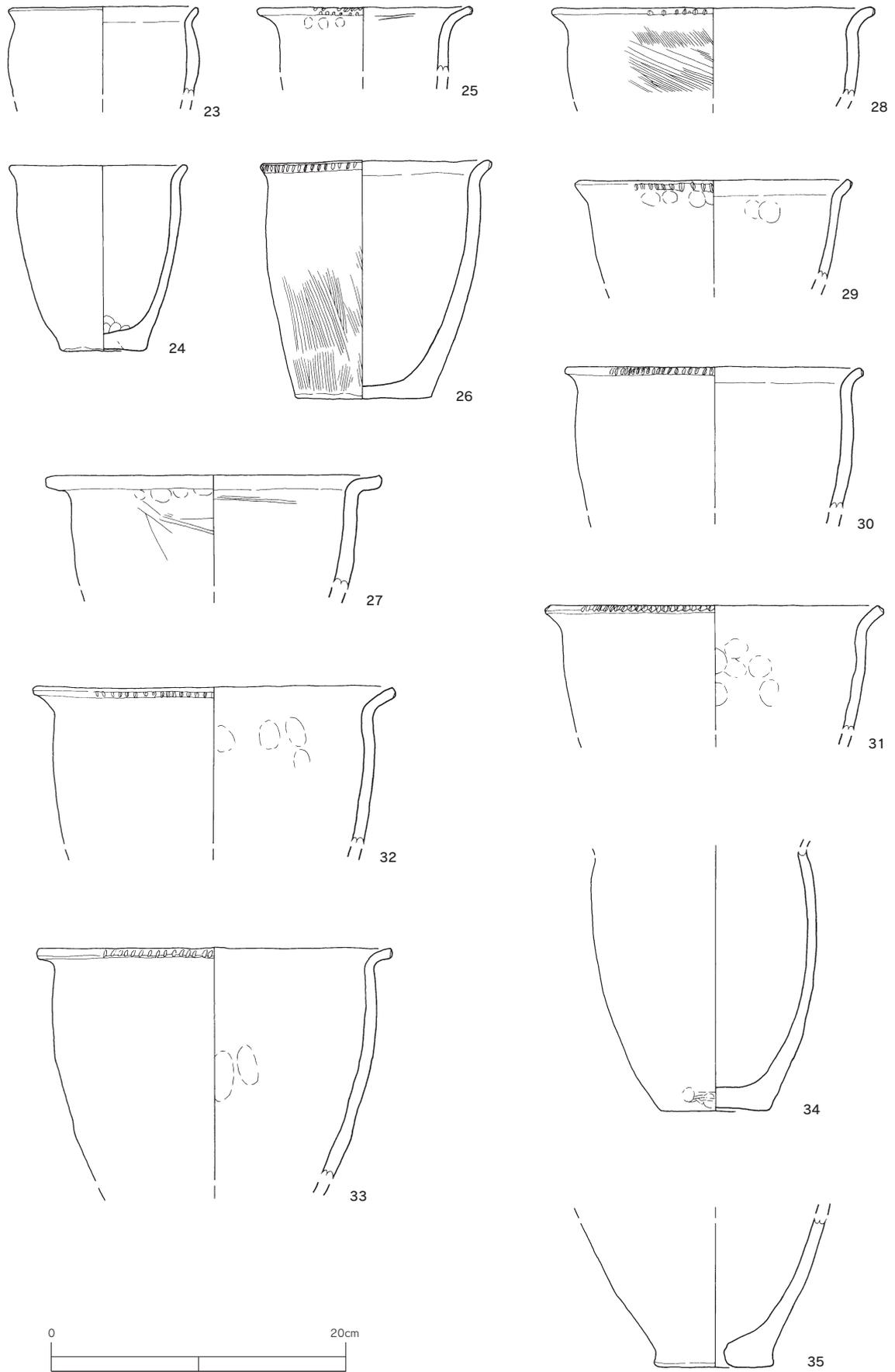
着がみられる。調整は不明。19も18と同様口縁と段に刻目を有する。口縁の刻目は横幅2mm弱で下端に施される。段の刻目も横幅2mm弱と口縁との差はみられない。内外面には横方向のハケメ状のナデが部分的に残る。20は口縁の上下両端に刻目が施されている。刻目は横幅2mm弱と小さく浅い。外面には段の上位に横方向のハケメ、下位に縦方向のハケメが残る。内面はナデによる調整。21は口縁の上下両端と段に刻目が施されている。口縁の刻目は横幅3mm程、段の刻目は横幅2mm弱と口縁よりも細い。内外面の調整は不明。ゆるやかではあるが、段を境に「く」字状に屈曲する外観と考えられる。22も口縁の上下両端と段に刻目が施されている。口縁の刻目は横幅3mm程、段の刻目は横幅2mm弱と口縁よりも細い。外面には胴部に横方向のハケメが残る。内面の調整は不明。

23～34は口縁下に沈線や段をもたないものである。23はゆるやかではあるが「く」字状に屈曲する口縁をもつ。口縁に刻目はみられない。器面は二次焼成を受けていて、残存状況はあまり良くないものの、外面にはわずかにハケメが残る。24は中央がわずかに窪む底部をもち、胴部はあまり張ることなく上半部は上方へ内湾気味に開く。口縁は短く外反し端部は丸く仕上げられている。23と同様に口縁の刻目はみられない。器面は二次焼成を受けていて、残存状況は悪いが、外面ではハケメがわずかに残る。内面の底部には指頭圧痕が密にみられる。25は口縁が大きく外反し、端部には上下両端に横幅2mm程の刻目が施される。26は平底の底部をもち、胴部はあまり張ることなく上半部は上方へ内湾気味に開く。口縁は短く外反し、端部全面に横幅2mm程の刻目が施される。器壁は厚く、外面には縦方向のハケメがみられる。27は口縁が水平気味に屈曲する。口縁外面には指頭圧痕が連続してみられ、胴部外面には一部に煤が付着し部分的にハケメが残る。全体の形状から器高はさほど高くないものと考えられ、鉢形を呈す可能性もある。28は口縁が外反し端部下端より横幅3mm程の刻目がしっかりと施されている。胴部外面にはハケメが残るが、口縁はヨコナデによってハケメは消されている。29は口縁が短く屈曲し、端部下端に横幅3mm程の刻目が施されている。口縁には指頭圧痕が残る。30は口縁が短く外反し、端部全面に横幅2mm程の刻目がしっかりと刻まれている。器面は二次焼成を受けていて、残存状況があまり良くないものの、外面はナデによる仕上げと思われる。内面の調整は不明。31は口縁が外反し、端部全面に横幅4mm程の刻目がしっかりと刻まれている。器面は残存状況があまり良くないものの、外面はナデによる仕上げと思われる。内面には指頭圧痕が残る。32は口縁が外反し、端部下端に横幅3mm弱の刻目が施されている。器面は残存状況があまり良くないものの、外面はナデによる仕上げと思われる。内面には指頭圧痕が残る。33は口縁が外反し、端部全面に横幅3mm程の刻目がしっかりと刻まれている。器面は二次焼成を受けていて、残存状況があまり良くないものの、外面はナデによる仕上げと思われる。内面には指頭圧痕が残る。34は口縁部を欠損するが、短く外反する口縁がつくものと思われる。やや上げ底の底部をもち、胴部はほとんど張ることなく上半部は内湾し口縁に至る。器面は二次焼成を受けていて、残存状況があまり良くないものの、外面底部付近にはミガキがみられる。

35はやや厚手の底部で裾は外方へ開く。底部中央には穿孔が施されている。



第24图 貯藏穴出土土器実測図2 (S=1/4)



第25图 貯藏穴出土土器実測図3 (S=1/4)

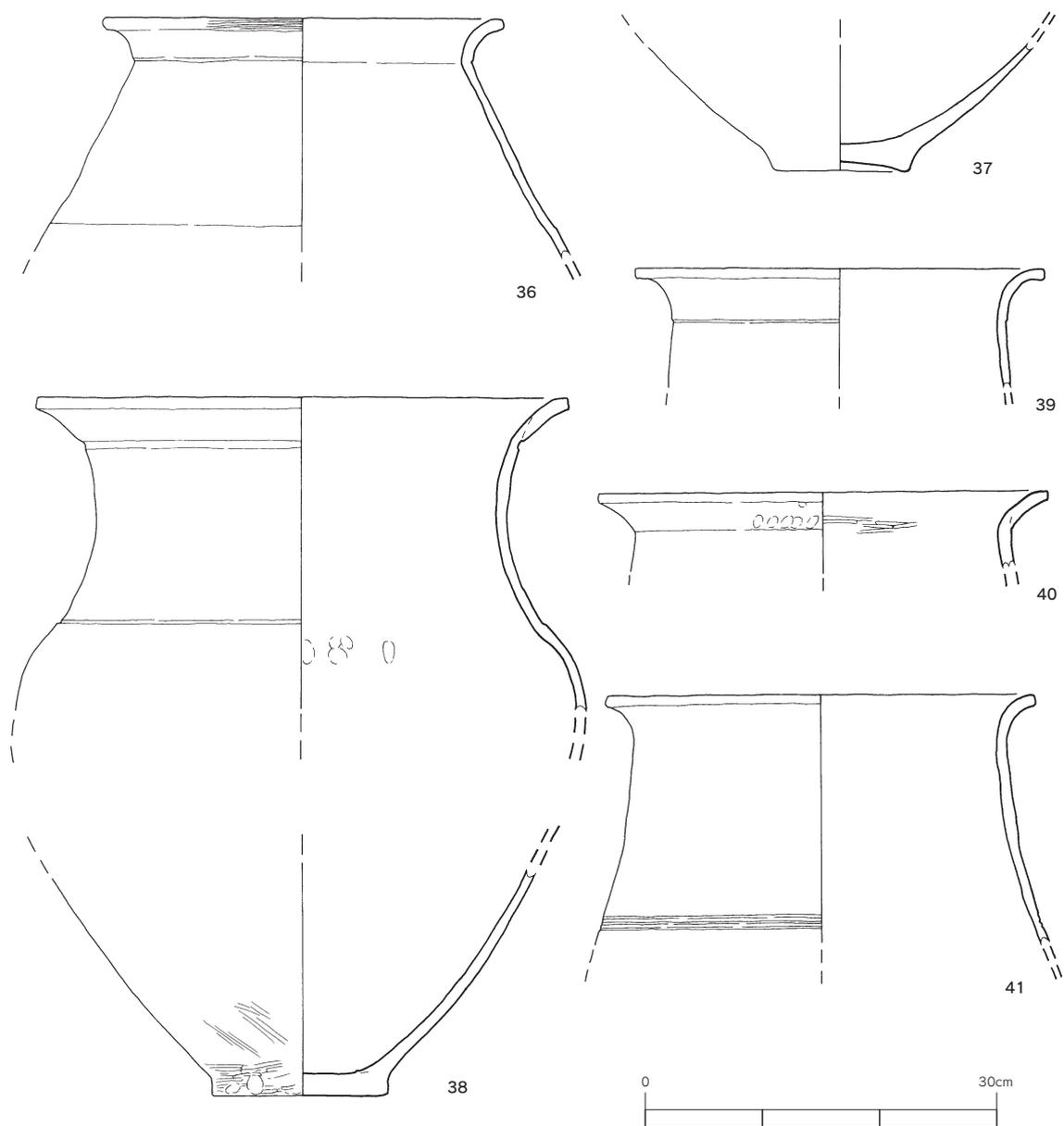
壺 (36～60) 36～41は大型壺である。36は口縁が強く外反し、端部はヘラミガキによって丸く仕上げられている。口縁は肥厚し頸部との境には明瞭な段、頸部と胴部との境には浅い段を形成する。器壁は全体に薄く外面にはミガキが残る。37は上げ底の底部で、36と同一個体になるものと考えられる。38は平底の底部で、胴部は倒卵形に開き最大径は上位にみられる。胴部と頸部との境は沈線状の浅い段をなし、頸部は上方へと立ち上がる。口縁は肥厚し頸部との境に段を形成するとともに、ゆるやかに外反し端部は面をなす。39は口縁が強く水平気味に外反し、端部は面をなす。頸部との境は浅い段を形成する。40は口縁が外反し、端部は面をなす。口縁は肥厚し頸部との境に明瞭な段を形成する。口縁下の外面には指頭圧痕が連続してみられ、内面にはミガキが残る。41は口縁が外反し端部は面をなす。口頸部の境は段をなさず、頸部はゆるやかに下方へと広がる。頸部と胴部との境は三条の沈線がめぐる。

42～44は外反する口縁端部を丸く肥厚させる特徴がみられ、頸部との境に段をもたない一群である。43は口縁下端に横幅3mm弱の刻目を施す。42、44は内面にヘラミガキを施すが、外面には部分的に肥厚部分の接合痕や指頭圧痕が残る。また、44には外傾接合の痕跡が残る。

45と46は小型壺である。45は口縁が大きく外反し、端部は丸く仕上げられている。頸部と胴部の境には浅い一条の沈線がめぐる。外面にはミガキ、内面には連続する指頭圧痕が残る。46は平底の底部をもち、胴部との境は明瞭に区分されている。胴部は球形をなし、最大径は中位にみられる。胴部と頸部、頸部と口縁の境には浅い一条の沈線がめぐる。内外面にはミガキが残る。

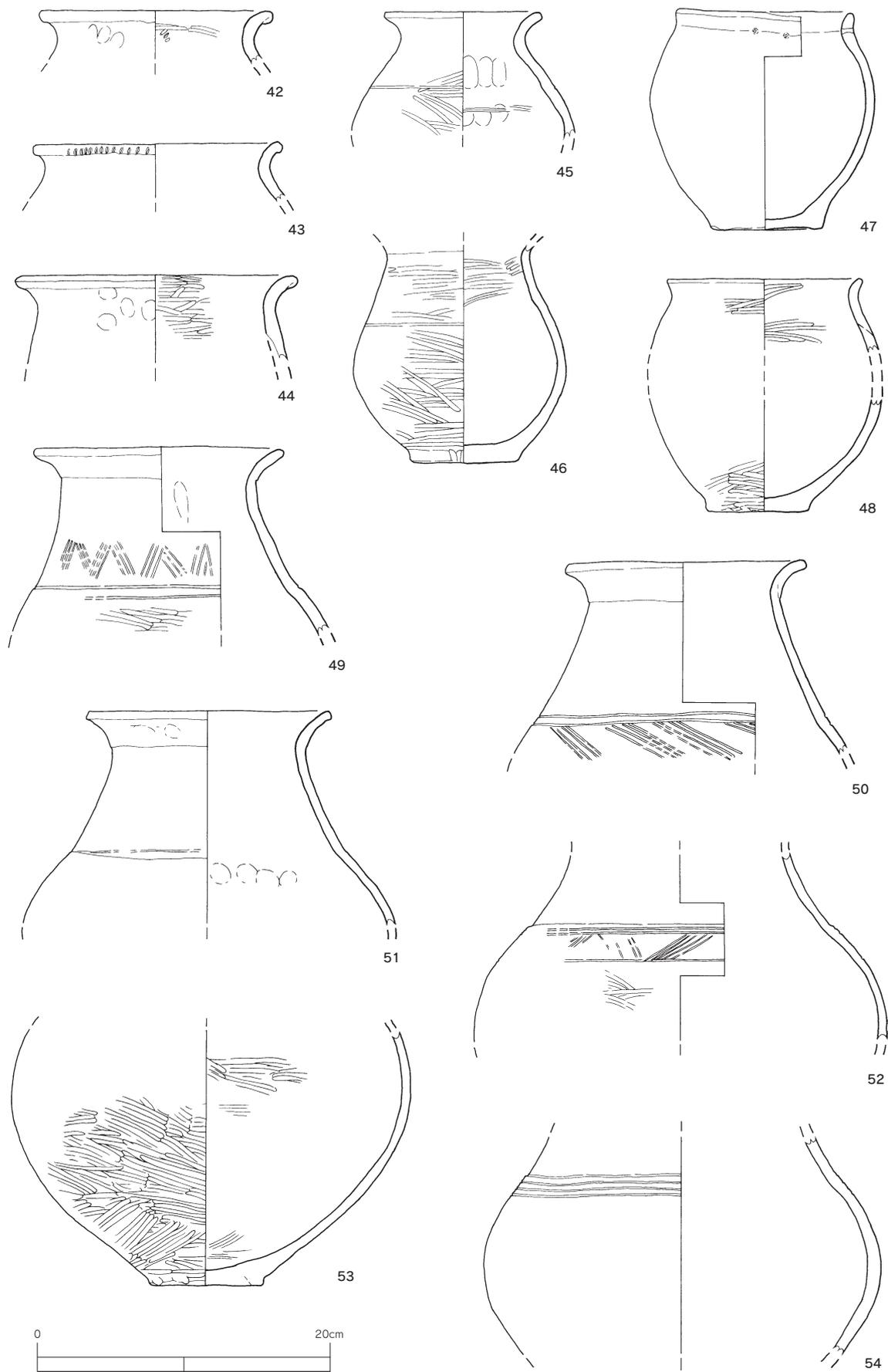
47と48は無頸壺である。47は薄手の平底の底部をもち、胴部の最大径はやや上位にある。口縁は短く、直立気味に開き、端部は丸く仕上げられている。口縁下には二個対の紐孔が穿たれる。内外面にはミガキの痕がわずかに残る。48は平底の底部をもち、胴部の中程を欠損するが、胴最大径は中位にあるものと思われる。口縁は短くゆるやかに外反し、端部は丸く仕上げられている。内外面にはミガキの痕が残り、断面には外傾接合の痕がみられる。

49～60は中型壺である。底部は平底が多く、わずかに上げ底となるものがみられる。49は外反する口縁の端部は丸く仕上げられ、口縁と頸部との境には浅い段、頸部と胴部の境には沈線状の段が形成される。段の下位には沈線、段の上位にはヘラ描きによる複線の山形文が施される。50は外反する口縁の端部は丸く仕上げられ、口縁と頸部との境には段を形成し、頸部と胴部の境には二条の沈線がめぐる。胴部上半にはヘラ描きによる複線の斜線文が施される。51は外反する口縁の端部は丸く仕上げられ、口縁と頸部との境、頸部と胴部の境には共に浅い段が施される。頸部下位には沈線が断続的にめぐる。52は頸部と胴部の境に明瞭な段を形成し、下位にはヘラ描きによる一条の沈線と二本の沈線で区画された複線の山形文が施される。53は器壁が薄く胴は球形に膨らむ。内外に密なヘラミガキを施す。胴下半に黒斑がみられる。54は頸部と胴部の境に沈線状の段を形成し、下位にはヘラ描きによる三条の沈線を施す。胴下半に黒斑がみられる。55は口縁が外反し、端部は丸く仕上げられている。頸部と胴部の境は明瞭な沈線がめぐり、上位にはヘラ描きによる一条の連弧文が施される。内外面にミガキ、胴下半に黒斑が残る。56は外反する口縁の端部は丸く仕上げられ、口縁と頸部との境には浅い段、頸部と胴部の境には沈線状の段が形成される。段の下位には二条の沈線がめぐる。胴部は

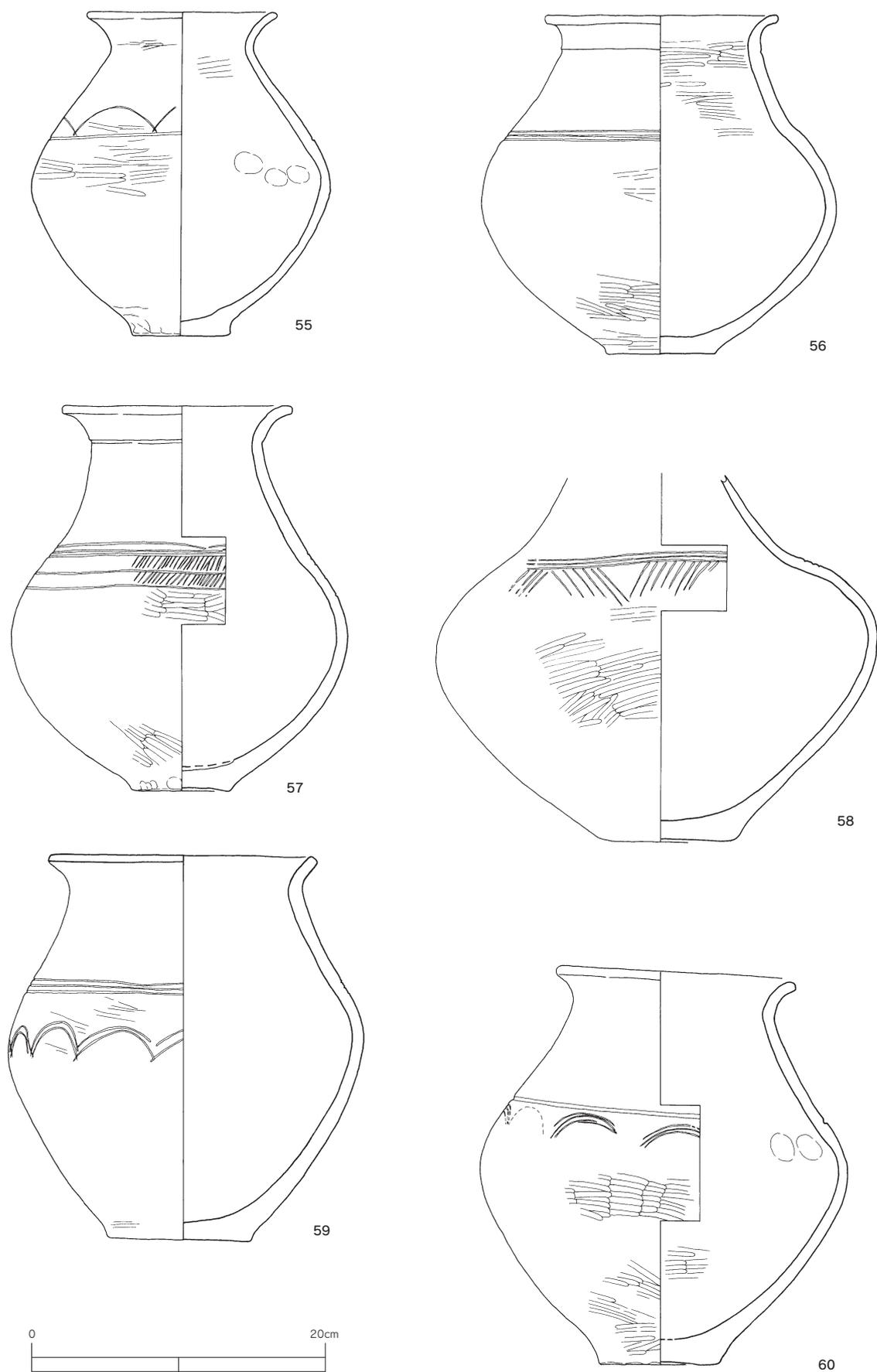


第26図 貯蔵穴出土土器実測図4 (S=1/6)

横方向に張り、内外面にミガキ、底部から胴下半に黒斑が残る。57は外反する口縁の端部は丸く仕上げられ、口縁と頸部との境には段を形成し、頸部と胴部の境には一条の明瞭な沈線がめぐり、沈線の上位にはさらに二条の浅い沈線、下位にはヘラ描きによる二段の斜線文が施される。底部と胴部の区別は比較的明瞭で、胴部は球形に膨らむ。内外面にはミガキが残る。58は底部から胴部にかけて直線的に開き、上半が強く張る外観をなす。頸部と胴部の境には三条の沈線がめぐり、下位にヘラ描きによる複線の山形文を施す。内外面にはミガキが残る。59と60は外反する口縁の端部は丸く仕上げられ、頸部と胴部の境に沈線がめぐり、下位にはヘラ描きによる重弧文が施されるという類似した特徴をもつ。共に胴部の最大径は上位にあり、内外面にはミガキ、底部から胴下半には黒斑が残る。



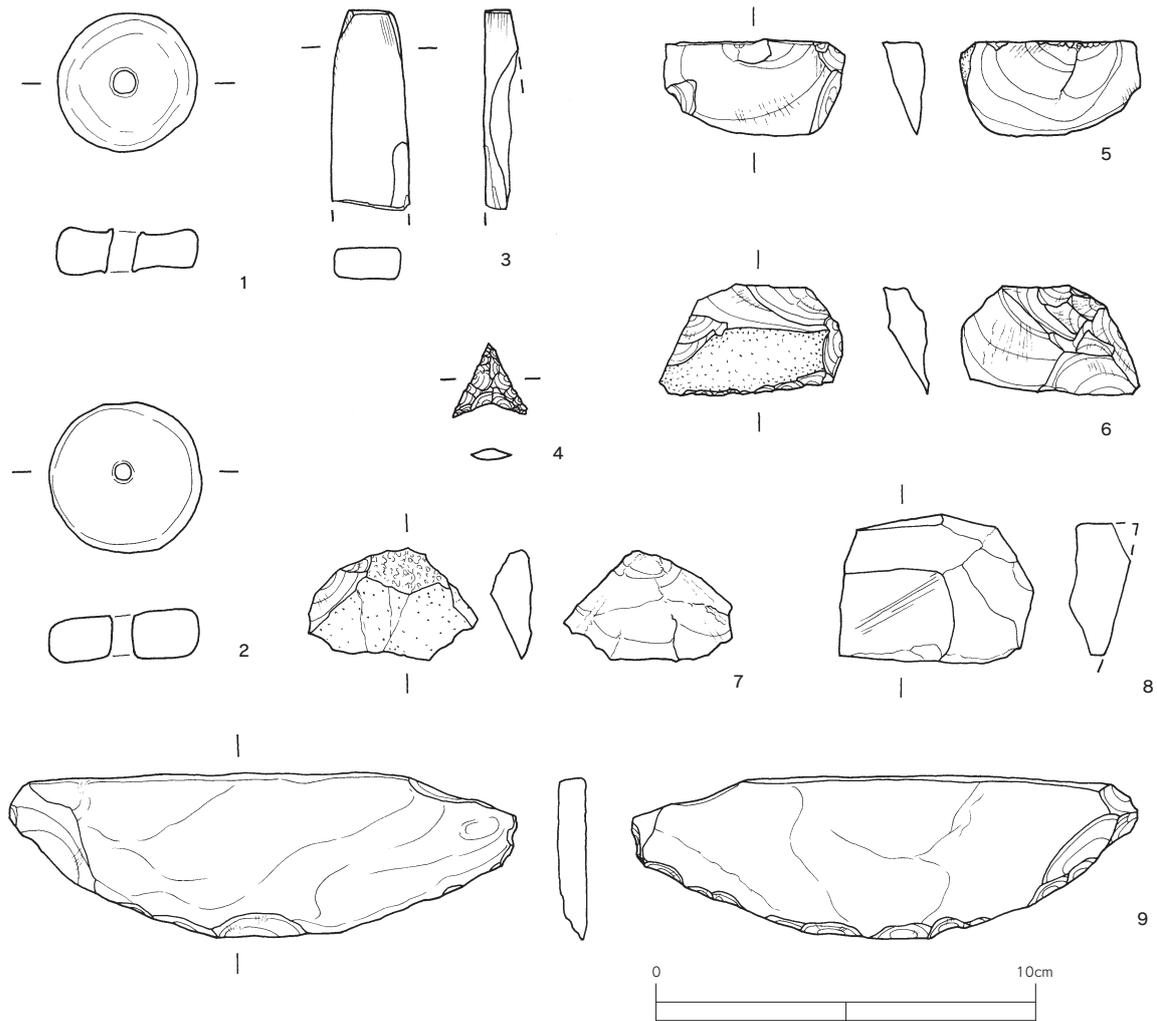
第27图 貯藏穴出土土器実測図5 (S=1/4)



第28图 貯藏穴出土土器実測図6 (S=1/4)

第3表 棧敷原遺跡出土土器観察表

図NO	遺物NO	器種	色調	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	焼成	胎土	備考
23	1	蓋	暗灰黄色	8.8	2.8	—	軟質	粗い	
23	2	蓋	にぶい褐色	径10.2	厚さ1.3	—	軟質	やや粗い	
23	3	蓋	橙色	22.4	10.7	6.7	軟質	やや粗い	
23	4	蓋	橙色	24	10	6.6	軟質	やや粗い	
23	5	蓋	浅黄橙色	25.3	12	7	軟質	やや粗い	
23	6	鉢	にぶい黄橙色	12.3	6.5	—	軟質	粗い	
23	7	鉢	にぶい赤橙色	15.9	10.5	6.2	軟質	粗い	
23	8	鉢	褐灰色	16.6	9.9	7.6	軟質	やや粗い	
23	9	鉢	赤橙色	19	10.8	7.3	軟質	やや粗い	
23	10	鉢	にぶい黄橙色	20.4	13.2	8.4	軟質	やや粗い	
23	11	鉢	にぶい黄橙色	32	18.3	7.8	軟質	やや粗い	
23	12	鉢	明赤褐色	21.5	14.9	8.7	軟質	やや粗い	
24	13	甕	浅黄橙色	17.8	6以上	—	軟質	やや粗い	
24	14	甕	灰赤色	30	6以上	—	良	2.5mm以下の砂粒を含む	
24	15	甕	淡黄色	21	11.3以上	—	良	3mm以下の砂粒を含む	
24	16	甕	灰白色	29.2	9以上	—	軟質	やや粗い	
24	17	甕	淡黄色	22.7	25.8	—	軟質	粗い	
24	18	甕	灰白色	22.2	10.8以上	—	軟質	やや粗い	
24	19	甕	灰白色	23.8	16以上	—	軟質	やや粗い	
24	20	甕	にぶい黄橙色	22	8.9以上	—	軟質	やや粗い	
24	21	甕	灰黄色	28.3	9.5以上	—	良	2mm以下の砂粒を含む	
24	22	甕	灰黄色	28.4	20.5以上	—	軟質	やや粗い	
25	23	甕	明赤褐色	13	6.2以上	—	不良	3mm以下の砂粒を含む	
25	24	甕	橙色	12	12.8	5.9	軟質	やや粗い	
25	25	甕	灰黄色	14.2	4.5以上	—	良	2mm以下の砂粒を含む	
25	26	甕	淡黄色	15.6	16.3	9.3	軟質	粗い	
25	27	甕	にぶい橙色	23	7.8以上	—	不良	2.5mm以下の砂粒を含む	
25	28	甕	橙色	22	6.3以上	—	良	2mm以下の砂粒を含む	
25	29	甕	浅黄色	18.8	7以上	—	良	4mm以下の砂粒を含む	
25	30	甕	明赤褐色	20.2	9.8以上	—	軟質	やや粗い	
25	31	甕	橙色	22.8	8.7以上	—	軟質	やや粗い	
25	32	甕	橙色	24.5	10.7以上	—	軟質	やや粗い	
25	33	甕	橙色	24.1	15.8以上	—	軟質	やや粗い	
25	34	甕	橙色	—	17.8以上	7.2	良	3mm以下の砂粒を含む	
25	35	甕	橙色	—	10.3以上	8	不良	3mm以下の砂粒を含む	
26	36	壺	黄橙色	34	20.5以上	—	軟質	やや粗い	
26	37	壺	にぶい黄橙色	—	11以上	11.8	軟質	やや粗い	
26	38	壺	にぶい橙色	45	45.7以上	15.2	軟質	粗い	
26	39	壺	にぶい橙色	35	10.5以上	—	軟質	やや粗い	
26	40	壺	にぶい黄橙色	38.9	6.5以上	—	軟質	やや粗い	
26	41	壺	にぶい黄橙色	36.4	21.5以上	—	軟質	やや粗い	
27	42	壺	黄灰色	16	3.2以上	—	軟質	やや粗い	
27	43	壺	にぶい橙色	17	4以上	—	軟質	やや粗い	
27	44	壺	灰色	18.4	6以上	—	良	2mm以下の砂粒を含む	
27	45	壺	にぶい黄橙色	10.6	9.4以上	—	軟質	やや粗い	
27	46	壺	浅黄色	—	15以上	7.6	軟質	粗い	
27	47	壺	にぶい黄橙色	12.2	15	7.7	軟質	やや粗い	
27	48	壺	にぶい黄橙色	13.3	16	7	軟質	やや粗い	
27	49	壺	にぶい橙色	17.1	13以上	—	軟質	やや粗い	
27	50	壺	にぶい黄橙色	16.5	13.2以上	—	軟質	やや粗い	
27	51	壺	にぶい橙色	16.4	14.7以上	—	軟質	やや粗い	
27	52	壺	にぶい黄橙色	—	13以上	—	軟質	やや粗い	
27	53	壺	にぶい黄橙色	—	17.5以上	7.8	軟質	やや粗い	
27	54	壺	にぶい黄橙色	—	15以上	—	軟質	やや粗い	
28	55	壺	にぶい赤橙色	13	22.2	6.6	軟質	やや粗い	
28	56	壺	浅黄橙色	15.9	23.4	7.5	軟質	やや粗い	
28	57	壺	赤色	15.8	26.5	6.8	軟質	やや粗い	
28	58	壺	明赤褐色	—	25.2以上	9	軟質	やや粗い	
28	59	壺	にぶい黄橙色	18.3	26.5	9.8	軟質	やや粗い	
28	60	壺	暗赤褐色	16.5	27.1	8.3	軟質	やや粗い	



第29図 貯蔵穴出土土製品・石器実測図 (S=1/2)

(3) 貯蔵穴出土土製品・石器 (図版16 第29図)

**紡錘車** (1・2) 土製品が二点出土している。1は両面が凹み、2は両面平坦な作りである。1は直径3.6cm、厚さ1.2cm、2は直径4cm、厚さ直径1.3cmを測る。

**柱状片刃石斧** (3) 黒色泥岩を用いた小形品で刃部を欠損する。現状で長さ5.1cm、幅2.1cm、厚さ0.9cmを測る。片面は基部を残し、大半が剥離している。

**打製石鏃** (4) 安山岩製で、二等辺三角形を呈し、基部には浅い抉りがみられる。長さ1.9cm、厚さ0.3~0.4cmを測る。

**削器** (5・6) いずれも安山岩製で、粗い打ち剥ぎによる横長の剥片を利用したもので、刃部には使用の痕が残る。5は長さ2.6cm、幅5.8cm、6は長さ4cm、幅4.9cmを測る。

**剥片** (7) 灰色チャートの横長剥片。片面には自然面、自然剥離面を残す。幅4.4cmを測る。

**砥石** (8) 砂岩製の砥石小片である。二次焼成を受けて破損している。

**石包丁** (9) 緑泥片岩製で未成品である。自然面を多く残し、刃部にあたる部分に一部加工が加えられている。長さ13.3cm、幅4.3cm、厚さ0.7cmを測る。

## 4 総括

本調査は貯蔵穴1基のみの調査ではあったが、土器片を中心とする大量の出土遺物があり、貴重な一括資料を得ることができた。最後に貯蔵穴から出土した土器の特徴、年代観等について述べておきたい。

器種は蓋・鉢・甕・壺形土器がみられる。高杯については明確な資料は確認できなかった。各器種の割合をみると、口縁形態が分かる資料196点のうち、蓋は6点（3%）、鉢は14点（7%）、甕は81点（42%）、壺は95点（48%）という値を示す。

**蓋**：甕蓋は未報告資料を含めて4点が出土しているが、いずれもつまみが部厚く頂部が抉れるようなものはみられない。これらは細部の差異はみられるが、法量等については規格性が高い。

**鉢**：口縁形態は外反するもの（如意形）と直口のものに大別されるが、前者が主体となる。全体の外観からは、口径に対し器高の割合が高く深めで底部から直線的に開くものと浅めでゆるやかに開くものに大別できるが、後者の方が主体を占める。

**甕**：口縁はいずれも外反し、如意形をなすものが大半である。底部は薄手の平底が大半で、わずかな上げ底となるものが少数みられる。外観の特徴から、これらは口縁下に沈線をもつもの（A類）、段をもつもの（B類）、何も無いもの（C類）に大別される。割合をみると、判別可能な資料47点のうち、A類が3点（6%）、B類が15点（32%）、C類が29点（62%）という値を示す。また、口縁端部の刻目の位置を下端側と全面とに大別してみた場合、判別可能な資料65点のうち、前者が42点（65%）、後者が23点（35%）という値を示す。ここで前述のA～C類との相関性をみると、口縁端部全面に刻目を施すものの大半がC類に含まれるという傾向が確認できる。また、C類の中には外面をナデ仕上げとするものが散見される。

**壺**：法量からは小型、中型、大型に大別される。外観の特徴からは口縁を肥厚することで頸部との境に段を形成し、頸部と胴部の境には浅い段もしくは沈線を施すものが主体を占める。また、胴部の最大径が中位にあって球形をなすものと、上位にあって肩が張るものがある。数量では中型品が最も多く、これらの中には頸部下位や胴部上位に装飾を施すものがみられる。装飾の文様はヘラ描きによるもので、多条の沈線のみを施すほか、山形文、斜線文、重弧文がみられる。ところで、器形から無頸壺となる一群が少数、確認されるが、この中で第27図の48は外観の特徴や製作技法から朝鮮半島の無文土器との類似性が指摘できるものである<sup>(註)</sup>。未報告資料の中には、小片ではあるが48と同様の器形と推定されるものがいくつかみられる。

以上、器種ごとの特徴を概観したところ、甕や壺の特徴を重視すれば、本貯蔵穴から出土した土器の年代観は弥生時代前期前半（板付Ⅱ式の古段階）に位置付けるのが妥当と考えられる。

また、石器については灰色チャートの剥片（第29図の7）が1点出土しているが、一般に本石材は中近世における火打ち石として使用されているものである。しかし、出土状況から本資料は混入品ではなく弥生時代前期の資料として捉えられる。近隣では市内の竹生島遺跡からも時期不明ながら1点の出土があり、石材利用に地域性を示す事例なのか、類例の増加を待ちたい。

（註）小郡市教育委員会 片岡宏二氏よりご教示頂いた。

# 圖 版





① 上層遺構群（北から）



② 下層遺構群（西から）

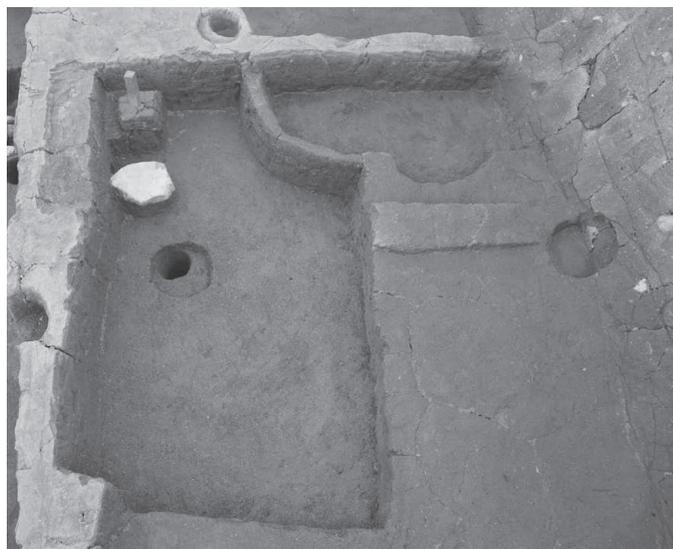
① 1号竪穴住居跡



② 2号竪穴住居跡



③ 2号住居跡  
土器出土状況



④ 4号竪穴住居跡



⑤ 4号住居跡 遺物出土状況



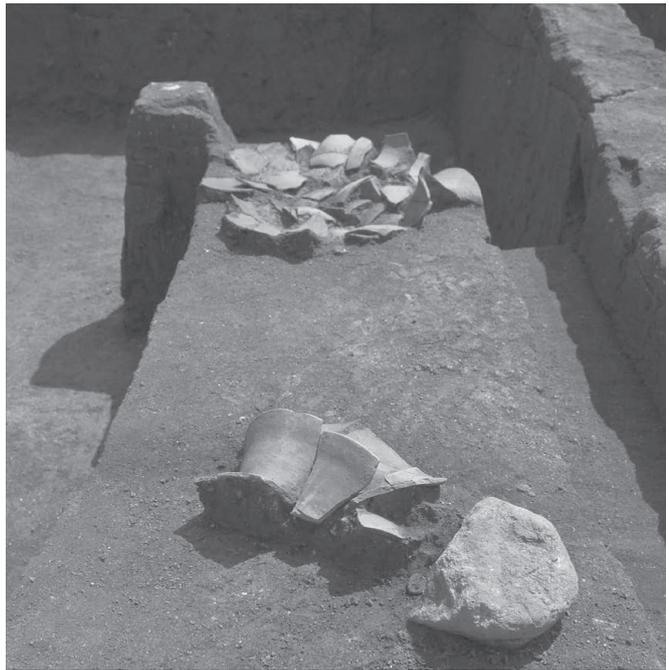
① 4号住居跡南隣ピット 土器出土状況



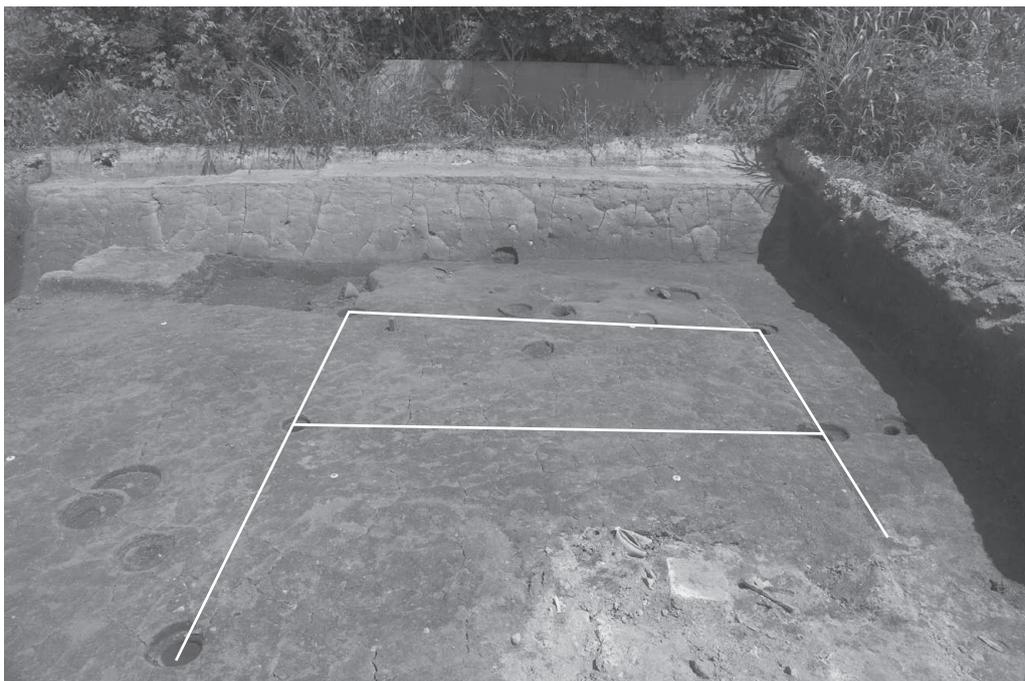
② 土坑 遺物出土状況



③ 3号竪穴住居跡



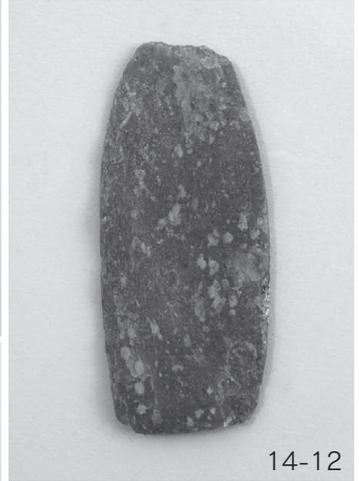
④ 土師器壺出土状況



⑤ 掘立柱建物跡









砥石・敲石





古式土師器



① 貯蔵穴 (西から)



② 貯蔵穴遺物出土状況 (南から)



③ 貯蔵穴遺物出土状況 (東から)



弥生土器 (蓋・鉢)





弥生土器 (甕) 2



26-36



27-47



27-46



27-49



27-48



27-50

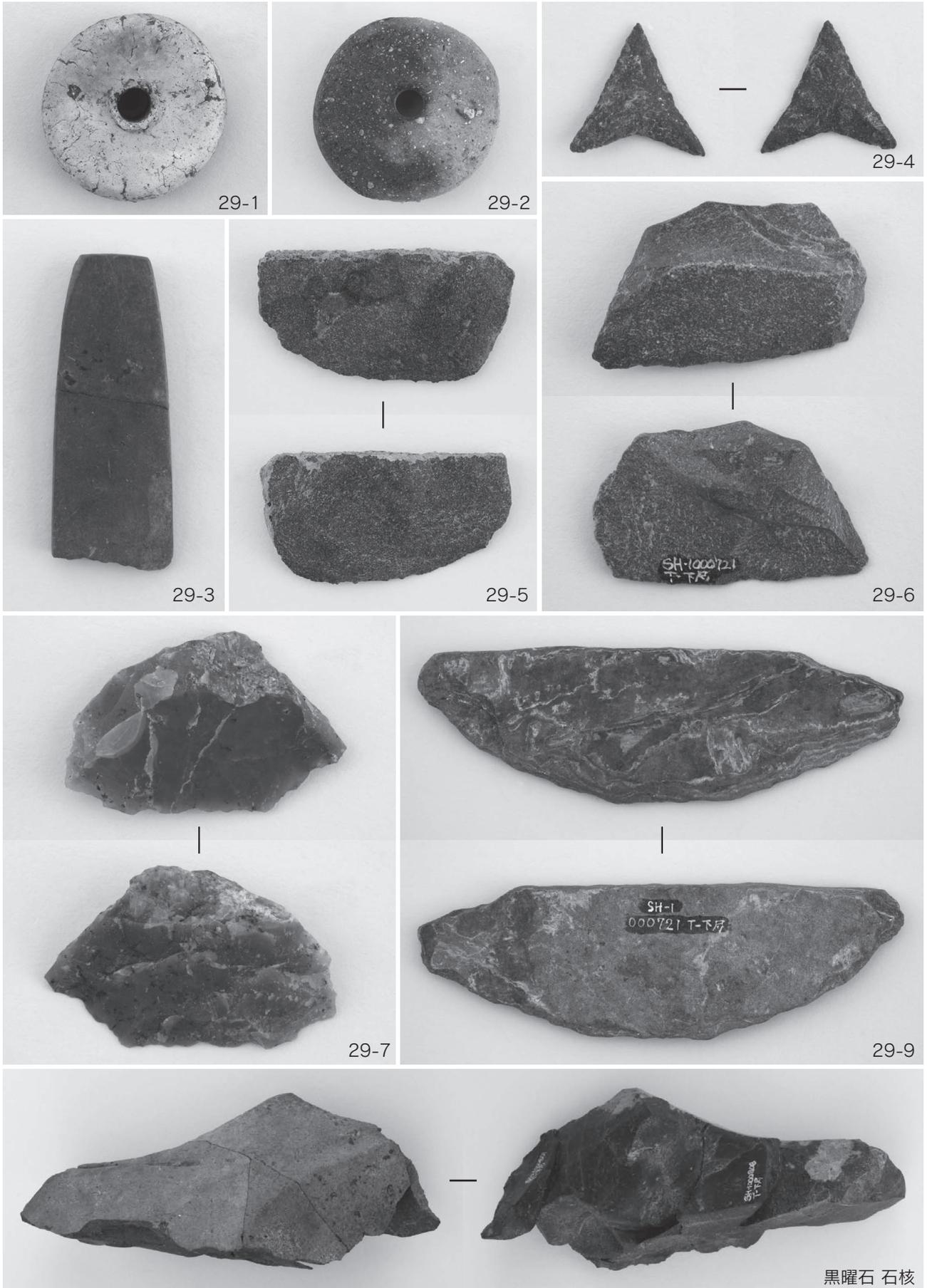


27-53

弥生土器 (壺) 1



弥生土器 (壺) 2



黒曜石 石核

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	いっちょうごたんいせき うすいせきぐん さじきばるいせき							
書名	一丁五反遺跡 臼井遺跡群 棧敷原遺跡							
副書名								
シリーズ名	嘉麻市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第3集							
編著者名	松浦宇哲(編) 福島日出海							
編集機関	嘉麻市教育委員会							
所在地	〒820-0392 嘉麻市大隈町733番地							
発行年月日	2012年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m <sup>2</sup>	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
いっちょうごたんいせき 一丁五反遺跡	福岡県嘉麻市 千手	402273	2184	33° 32' 10"	130° 43' 19"	20090819 ～ 20090904	72	記録保存調査
さじきばるいせき 棧敷原遺跡	福岡県嘉麻市 下臼井	402273	2096	33° 34' 8"	130° 42' 29"	20000801 ～ 20000815	3	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
一丁五反遺跡	集落	弥生時代・古墳時代		竪穴住居跡・土坑・ 掘立柱建物跡		弥生土器・土師器・ 須恵器・石器		弥生中期後半の遺構群が 密集。砥石が多く出土
棧敷原遺跡	集落	弥生時代		貯蔵穴		弥生土器・石器		弥生前期の良好な一括資 料
要 約	<p>一丁五反遺跡は、弥生時代中期及び古墳時代後期を中心とする集落跡である。弥生時代の遺構からは、扁平片刃石斧等の製作に使用されたと推定される大・中・小の砥石が出土した。また、蛇紋岩製の石斧、石剣状磨製石器など在地色の強い遺物の出土が特徴的である。</p> <p>棧敷原遺跡は弥生時代前期の集落跡である。貯蔵穴から出土した弥生土器は良好な一括資料として嘉穂地域の基準資料となるものである。これらの中には朝鮮半島の無文土器との類似性がうかがえるものが含まれる。</p>							

嘉麻市文化財調査報告書 第3集

一 丁 五 反 遺 跡  
臼井遺跡群 棧敷原遺跡

平成24年3月31日

発行 嘉麻市教育委員会  
嘉麻市大隈町733番地

印刷 マツオ印刷株式会社  
福岡県嘉麻市上山田407番地



